十全同窓会会報 172

2019／5

目　次｜CONTENTS

卒業生に贈る言葉……03
就任挨拶……04
退職のご挨拶……07
退職記念講演会……10
受賞……12
医師国家試験結果……15
十全学術行脚……16
病院紹介……18
教室だより……20
支部だより……22
十全昔話……28
謝恩会……30
平成31年3月卒業者進路… 31
Student Doctor認定証授与式…32

2019年度　金沢大学医学部十全同窓会総会

日　時　2019年7月6日(土)　午前9時～
場　所　医学部記念館

式次第
一、開会の辞
一、議長選出
一、議長挨拶
一、物故会員に対する黙祷
一、報告　土屋　弘行　理事長
一、医学系・医学類報告　和田　隆志　医学系長・医学類長
一、医薬保健学総合研究科報告　堀　修　医薬保健学総合研究科長
一、先進予防医学研究科報告　市村　宏　先進予防医学研究科長
高安賞贈呈式
一、支部紹介
一、議案審議
(一)　2018年度事業及び決算報告
(二)　監査報告
(三)　2019年度事業計画及び予算(案)
(四)　役員改選
(五)　その他
一、閉会の辞

《教授就任記念講演》午前10時～12時
概日リズムに着目した疾病の予防・治療法の開発　細胞分子機能学　安藤　仁　教授
体内時計・睡眠覚醒システムの統合的理解と疾患への応用に向けて　統合神経生理学　三枝　理博　教授
自閉症の発症メカニズムの解明と創薬開発への応用　～自閉症は大人になっても治せるか～　組織細胞学　西山　正章　教授
T細胞分化を制御するパイオニア転写因子とクロマチン・ランドスケープ　分子遺伝学　倉知　慎　教授

◇教授就任講演は、医薬保健学総合研究科(医学博士課程)のUp-to-dateコースを兼ねます。
◇石川県医師会生涯教育研修会指定を受けております。多数ご来聴ください。

卒業生に贈る言葉

医学類長
和田　隆志

皆さん、ご卒業おめでとうございます。本年度、医学類では106名の卒業生を送り出しました。金沢大学医学類の教職員を代表して、心よりお祝いを申し上げます。伝統ある金沢大学医学類の卒業生として、どうぞ誇りと自信を持って医師・医学研究者としての第一歩を踏み出し、そして歩み続けてください。

6年間の医学類での学生生活はあっという間に過ぎたように感じているかもしれません。この間、振り返れば在学中に着実に医師・医学研究者に向けて準備をしていました。5年生ではほぼ1年間試験がなかったと思います。これは就学して以来、初めてのことだったと思います。試験勉強だけではなく自発的な学びの真髄もここにあります。6年生では講義も少なくなりました。1年も経たぬうちに最新の医学知識は倍加しています。AIとの共存・発展という課題も今後さらに大きな鍵となり、増加する知識量に拍車をかけるでしょう。本質をうまく掴み、知恵に変え、臨床・研究に生かしていく重要性にも気が付いたことと思います。

この卒業を迎え、また新たに大きな転換点を迎えています。これから進んでいく臨床・研究において、これまでの試験問題のように模範となる答えは与えられません。特に医師は人間が対象です。答えは容易に得られないかもしれません。そして、答えは一つとも限りません。その答えは受動的ではなく自ら求めることになります。何より医師は専門家集団です。常に新たな医学・医療を学び、それを生かすことが求められます。また、その覚悟も必要だと思います。どうぞ幅広く、そして瑞々しい好奇心を持って歩んでください。「日常的でないものにぶつかったとき、即座に応用がきくということ、それが教養というものです」（福田恆存）との含蓄ある言葉もあります。専門知識に加えて、幅広い視野・視点のもと、異分野との他流試合など積極的に進めるなかで教養を深め、人、社会人としても大きく成長されることを期待しています。

皆さんは数十年続く医師・医学研究者のスタートを切りました。まずこの数年間はとても重要な時期だと思います。ウィリアム・オスラー博士は前途ある若者に人生指針を示しています。第一は超然の術、すなわち自己抑制の習慣や集中力という能力の涵養、第二は系統的方法の徳、すなわち毎日繰り返すことを効率の良いシステム的な習慣にすること、第三は物事を徹底して行う特性、第四は謙遜の徳を持つことを示しています。合わせて、絶えず勉強しよう、陽気な気持ちを持とうとも励ましています（『平静の心―オスラー博士講演集』）。ぜひ、皆さんの良い習慣に磨きをかけてください。そして、一日一日を大切に過ごし、医師・医学研究者としての重要な礎を築くことを祈っております。

医師・医学研究者として緒についたばかりの皆さんは自分が何に向いているか自問自答していることと思います。研修医として患者と出会うのは偶然です。この予期せぬ出会いがその後の皆さんのキャリアを左右することもあると思います。目の前の患者の病態などを調べて行くうちに、ふと新しい発見があるかもしれません。患者との偶然の出会いが必然にかわる瞬間を実感することもあると思います。そういった積み重ねが医学・医療の進歩につながるように思います。研究でも同じような瞬間があるのではないでしょうか。近年、基礎・臨床を問わず研究を志すものの減少が指摘されています。ぜひ、ワクワクしながら研究にも触れてみてください。そして、医師・研究者として、ライフワークとなる様な精魂傾けるにふさわしい素敵なものを見出してください。

彦三種痘所以来の150年を超える歴史と、旧制第四高等学校の伝統もある金沢大学と学都金沢は、前途洋々の学生を育む文化が醸成されていると思います。この文化と伝統の薫る恵まれた環境の中、ともに学び舎で過ごした友人は今後もかけがえのない存在になってくれると思います。さらに十全同窓会の先輩・後輩はじめ、多くの方々とのさまざまな絆がこれからも生まれることになると思います。ぜひ、新たな出会いも大切にしながら歩んでください。皆さんが医師・医学研究者として大成することを心より祈っております。

就 任 挨 拶

高村　雅之　博士
（平成5年卒業）

循環器内科学の進歩と内科再編

平成31年1月1日付で、金沢大学医薬保健研究域医学系・循環器内科学分野の教授を拝命いたしました。

金沢大学医薬保健研究域医学系循環器内科学分野教授に就任

私は、平成5年に本学を卒業し、小林健一先生の主宰されていた内科学教室に入局しました。内科医としての経験を重ねながら、重症心不全治療、不整脈に対するカテーテルアブレーション、虚血性心疾患に対するインターベンション治療を専門として大学病院を中心に研鑽してきました。平成11年から2年間モントリオール大学附属心臓研究所に、研究ならびに臨床フェローとして留学する機会に恵まれ、覚醒犬における冠循環動態解析に関する基礎研究と先端機器を用いたインターベンション治療を、経験することができました。

その後も、高度先進医療の保険医療承認試験や、再生医療開発臨床研究に携わってきました。

金沢大学の循環器内科学分野は、本年4月の内科再編に合わせて、非常に多くの医局員を要する研究分野となります。さらに、北陸三県の基幹病院と協力して、地域医療を支えていく重責を担うことになります。これまでの業績・実績を礎に、遺伝子解析、遺伝子発現解析、蛋白質量分析、再生医療基礎研究、新規デバイス開発などを融合させ、その研究を加速させていきたいと思っています。結果として、若い世代に、「あの時の内科再編があって良かった」と思ってもらえるように学生教育、研修医指導、博士研究、専門医育成、全ての面において注力していきたいと思います。

今後も十全同窓会の皆さまには、一層のご指導、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

菊知　　充　博士
（平成6年卒業）

地域医療と世界標準を視野に入れた教育

令和元年5月1日付で、金沢大学大学院医学系研究科・脳神経医学領域・精神行動科学（神経科精神科）の9代目の教授を拝命しました。当教室は、1909年金沢医学専門学校精神病、神経病、法医学講座が開設されたことが神経精神医学教室の端緒で、現在までに110年の歴史があります。

精神医学が社会から求められている事が、年々大きくなっていることを、重く受けとめております。2011年には５大疾病の１つと位置づけられて以来、医療・福祉関係の教育における精神科実習の時間を、充実させるように求められ続けています。さらに精神科医療をとりまく課題として、精神科救急医療と身体合併症（精神科病院の機能分化）、精神障害者の地域移行（入院から外来へ）、総合病院におけるコンサルテーション・リエゾンの充実、自殺対策（うつ病の早期発見、再発予防）、子どもの精神保健の向上（予防精神医学）、高齢化対策など、重要案件だけでも、数えきれません。さらに、教育における緊急の課題として、2019年度からは、精神医学が金沢大学の診療参加型実習のコア教科となります。世界医学教育連盟グローバルスタンダードを満たすために、学部生教育にかつてないエフォートを必要とする時代になり、重要な責務を感じております。そして、脳科学研究においても、社会性の脳科学領域の発展に伴い、精神医学に求められるものが、年々増大しております。

自己研鑽できる教室を目指してまいります。これからも精神医学へのご理解と、ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

金沢大学医薬保健研究域医学系精神行動科学教授に就任

名古屋市立大学整形外科学講座教授に就任

村上　英樹　博士
（平成5年卒業）

金沢十全魂で頑張ります

平成31年2月1日付で名古屋市立大学大学院医学研究科整形外科学分野の教授を拝命いたしました。

私は平成5年に本学を卒業し、ただちに富田勝郎教授の主宰する金沢大学整形外科学教室に入局しました。平成6年1月からは市立敦賀病院で1年3カ月、平成7年4月からは石川県立中央病院で1年9カ月の修練を積みました。その後、金沢大学の脊椎班に配属となり、富田勝郎先生と川原範夫先生のもと脊椎疾患の研究と臨床に邁進しました。平成10年には、公益財団法人吉田育英会の海外派遣留学生に選抜され、米国エモリー大学に2年間留学させていただきました。帰国後は、脊椎腫瘍と骨粗鬆症の研究を進めながら、富田教授の最後の医局長を務めました。平成22年に、土屋弘行教授のもと脊椎班チーフとなり、新しい脊椎がん根治的手術を開発し、基礎研究・臨床研究を進め、日本医師会医学研究奨励賞や金沢市医師会金沢医学館記念医学賞などを受賞しました。平成27年には、タイのコンケン大学から招聘されこの手術を施行し、タイ王国政府から感謝状を頂戴し、平成29年の米国整形外科学会ではこの手術ビデオでアワードを受賞させていただきました。

振り返れば、私は金沢生まれ金沢育ち、特に秀でたものがある訳でもなく、ただ、素晴らしい恩師や友人そして後輩に恵まれ、『見賢思斉』の気持ちで頑張ってきました。本当にご縁と運にも恵まれて皆さまにここまで引き上げていただいたと思っています。このような私が、名古屋市立大学でどれだけ力を発揮できるか分かりませんが、必ずや金沢十全魂を見せ、名古屋という大都会のうねりを乗り越えたいと思います。今後とも倍旧のご指導ご鞭撻のほど何卒よろしくお願い申し上げます。

東邦大学医学部外科学講座乳腺内分泌外科分野教授に就任

榊原　雅裕　博士
（平成6年卒業）

豊かな人材を育て、魅力ある医局を創りたい

平成30年11月1日付で東邦大学医学部外科学講座乳腺内分泌外科分野教授（東邦大学医療センター佐倉病院勤務）を拝命いたしましたので、謹んでご報告させていただきます。

私は平成6年に本学医学部を卒業し、同年に千葉大学医学部附属病院第一外科（現臓器制御外科）に入局いたしました。平成16年に同乳腺甲状腺外科助手となり、乳癌の臨床教育研究に従事しました。臨床では、MRIやCT画像を乳癌手術に直接的に用いる手術法（MRIガイドおよびCTガイド手術）を考案し、切除範囲同定困難症例に対する乳房温存手術を可能としました。また3D画像解析ソフトウエアを用いた乳房温存手術術後の整容性予測法や新しい乳房部分再建法を考案いたしました。

研究では、乳癌における腫瘍浸潤リンパ球（Tumor-infiltrating T cells：TILs）、細胞極性、癌幹細胞などをテーマとしてその成果を報告してきました。最近では、乳癌のTILsにおける免疫寛容（制御性T細胞および制御性B細胞の協働性）に注目しております。

その後、平成29年10月に国際医療福祉大学病院講師となり、平成30年11月に現職となりました。現在も乳癌の新しい手術法の開発に注力しており、乳房同時再建における術後合併症や在院期間を軽減する低侵襲性の乳房切除法（乳房全摘）を考案し、その成果を検討しております。今後東邦大学において、本学医学部で学んだ先進的な臨床教育研究の精神を生かし、豊かな人材を育て、魅力ある外科の医局を創りたいと存じます。

最後に、母校医学部と十全同窓会のさらなる発展を祈念いたします。今後ともご指導よろしくお願いいたします。

就 任 挨 拶

鹿児島大学大学院医歯学総合研究科法医学分野教授に就任

林　　敬人　博士
（平成16年卒業）

社会的要請に応えるため学生教育にも尽力したい

平成31年4月1日付で、鹿児島大学大学院医歯学総合研究科法医学分野の教授を拝命いたしました。

私は平成16年に金沢大学医学部医学科を卒業後、直ちに和歌山県立医科大学大学院（法医学、近藤稔和教授）に入学し、法医学者として歩み始めました。平成20年に同大学院を修了し、ご縁をいただき、同年に鹿児島大学の助教となり、以後、講師、准教授を経て今日に至っております。

大学講座として法医学の最大の任務は、実務を通した社会貢献です。法医実務の中心である法医解剖と死体検案を合わせて年間250件以上を行っていますが、今後、超高齢化による多死社会に伴い、さらに増えることが予想されています。また、小児虐待やDVの被害者に対する生体鑑定を行っております。さらに、医療関連死などで法医学的な知識が求められる機会もあり、社会における法医学のニーズはますます増加すると思われます。

研究としては、大学院時代に習得した分子生物学手法に基づいた虐待の新たな法医学的診断法、入浴死の病態解明を目標として行ってきました。いずれも今まさに社会問題となっており、重要なテーマです。死者から得られた知見を生者に還すことが法医学研究の最大の目的ですので、今後も続けてまいりたいと思います。

実務、研究面のいずれも社会的要請が増えており、法医学者の育成は急務となっています。私が学生時代に基礎配属に通って法医学を志したように、鹿児島大学の学生にも法医学の魅力を伝えられるように学生教育にも尽力したいと思います。

今後も法医学の発展、社会貢献に精一杯努力する所存ですので、十全同窓会の皆さまには一層のご指導、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

お知らせ

各支部における同窓生の学術的・医療的活動状況について、寄稿をお待ちしております。

〒921-8640　金沢市宝町13-1
金沢大学医学部十全同窓会　会報編集委員会
TEL. 076-265-2132
FAX. 076-234-4208
Email juzen@med.kanazawa-u.ac.jp

退職のご挨拶

医薬保健研究域医学系
精神行動科学（神経精神医学）
三邉　義雄

同窓会会員の皆さまにはいよいよご清栄、ご健勝のこととお慶び申し上げます。

平成30年度は私の教授として13年目で在職最後の年度でしたが、幸い私は業務上や健康上などの大きな問題もなく、ここまでやってこられました。会員の皆さまの、平素のご助力ご支援に対し、誌上にて改めて心よりお礼申し上げます。主任教授の最大の務めとしては、主に臨床のための人材と主に研究のための資金の獲得、さらにそれらに支えられた医学教育の充実であることを肝に銘じ、定年までお陰様で「前向きに楽しく」精進いたしてきました。最近進展がみられた卒後教育の整備に続き、来年度からは、医学部卒前教育の大改編が始まります。従来の、座学・知識教育から実習・実践教育の流れがさらに加速し、重要診療科6つ（内科、外科、精神科、救急科、産婦人科、小児科）の実習時間大幅増加の方向も示されています。これらは、国際化＝米国型の医学教育の導入、と聞いております。

さて、この機会に私の自己評価を敢えて公開し皆さまのお付託に委ねたいと思います。まず、人材獲得ですが、その指標は入局者数に主に反映されます。最近10年間の入局者数は42名で、年平均4.2名という数字が出ております。私は赴任当初から、地域医療の維持のために年平均5名以上の入局を目標としたいと、医局でも公言しておりました。評価は目標を大きくはないが下回ったので、金沢大学にならいS・A・B・C評価にすると、B評価になります。一方、研究資金獲得ですが、結論的にはS評価と自負しています（目標とする結果を超えた＝S）。その最大の要因は、私の赴任と相前後してできた、金沢大学子どものこころの発達研究センター（以下センターと略す）＋5大学連合大学院小児発達学研究科の存在でしょう。現在は、同様のセンターが全国の7大学に併設され、まさに多施設共同研究の良い土壌になっております。私が院生の頃は臨床と研究の両立をむしろ楽しんでいたのですが、最近は臨床・研究ともその業務量が増加し、可能なら時間的に臨床業務と研究業務に集中する時期を別にする必要が出てきました。比較的研究に時間がさけるセンターの設置により、優れた研究業績産出と大型資金を核とする研究資金獲得の良い循環作用が、この10年間切れ目なく継続できたと思います。その結果、精神科関連研究に、毎年1億5千万から2億5千万の研究費を投入できました。その半分以上は人件費ですが、非常にときめくことに、研究スタッフの背景は医学、脳科学、工学、教育学、心理学、数学、芸術、企業、海外と非常に多岐に広がっております。精神医学や脳科学関連研究が、「人間とは何か、人間らしさとは何か」、「なぜ子どもは、人間らしくなるのか」という根源的命題と関連していることが、その最大の理由と思います。また、長寿社会になり、「長く生きること以上に充実して生きる」ことへの国民の期待が高まっていることも一因です。その結果、その期待に沿う社会実装を目指し、精神医学や脳科学関連研究に国や企業からの投資が増えたと認識しています。また、就学前の子ども関係の研究内容のためか、自ら子育て中の女性研究者が多いのも特徴です。

とにかく挙子育児の問題が21世紀の我が国の最重要案件であることは間違いなく、臨床・研究・教育サイドでも今後のこの問題への社会投資増大に引き続き備えるべきでしょう。今後はITやAIなどの進展で社会構造変化が加速し、たとえば「金沢大学」や「精神医学」や「精神病院」という従来旧来の概念と実体が、大きく変化する予感もしています。また気になるのは、社会全体に広がる格差問題です。これは古今東西の永遠のテーマですが、「世界での経済格差」、「東京と地方」、「金沢と能登」など、精神科領域でもとても悩ましい問題です。一方、何事も平等という考えも無理があるので、結局「その時代、その地域にあったバランス感覚と、それによる合意形成」が、落としどころでしょうか？

最後に、会員の皆さまの一層のご活躍ご健勝をお祈り申し上げ、退職のご挨拶とさせていただきました。退職後、私は富山県の総合病院精神科で勤務させていただきますので、今後とも、引き続きどうぞよろしくお願い申し上げます。

退職のご挨拶

金沢大学医薬保健研究域医学系
分子細胞病理学（病理学第一）
大井　章史

私は医学部を卒業すると、すぐに、梶川欽一郎教授の主宰する大学院へ進学しました。与えられたテーマは‘線維芽細胞’で、ラットとマウスの背中の皮膚をくりぬいて形成される肉芽組織の電顕写真を撮り続けました。3年目のある日、創傷治癒4カ月の線維性瘢痕組織にもう一度創を作った時、小胞体の中に変性した膠原線維を入れた、まさに‘fibroclast’と呼べる奇妙な細胞を見つけました。心がときめいた瞬間でした。当時の大学院では、主任教授がOKをだせば医学博士になれましたが、梶川先生は大変厳しくて、必ずしも大学院を4年で卒業できるという保証はありませんでした。私も、この奇妙なfibroclastに出会わなかったら、大学院で躓いて、病理学を続けていなかったかもしれません。

今、40年余りの大学人生活を振り返ってみると、研究生活を続けることができたのは、自分だけの発見に心ときめく瞬間の、耐え難い甘美な誘惑であったように思えます。これを知ってしまったからこそ、土曜日も日曜日も、早朝でも深夜でも研究室に足が向いたのでしょう。

2度目の大きなときめきは免疫電顕で、胃癌細胞にクロモグラニンA陽性顆粒を証明した時です。電子顕微鏡H500の緑色の蛍光版に、金コロイドの顆粒で標識された分泌顆粒が写し出された瞬間を今でも思い出します。

3度目はfluorescence in situ hybridization（FISH）を始めてから間もなくのことでした。1966年のNakaneらによるperoxidase法、1970年のSternbergerらによるperoxidase-anti-peroxidase法、続いて1981年Hsuらによるavidin-biotin peroxidase法の発明による蛋白同定法の発達により、この頃の病理学会は隆盛を極めていたように思います。その中にあっても、私は、癌は遺伝子の病気であるから、癌の病理をやる以上は遺伝子を絡めた病理学をやらないといけないと考えていました。そこで始めたのがFISHでした。蛍光色素で標識したDNAプローブを使って、細胞あるいは組織切片上で癌遺伝子を同定しました。蛍光顕微鏡下に、胃癌細胞の核にHER2遺伝子の増幅を示す橙色の凝集したシグナルが現れたときは‘やった’と思いました。当時は、3日間かけて作成したFISH標本の蛍光は蛍光顕微鏡下では2分もたたずに消失する儚いものでしたが、紅灯に誘われるように毎晩暗室に籠りました。

4度目の忘れがたい感動は、山梨医大から金沢大学に戻ってからすぐの時でした。この頃、Nature Genetics誌上で、「乳癌におけるエストロゲン受容体の発現が、遺伝子増幅によっておこるか否か」について激しい論争がありました。当時、私は「FISHで見る遺伝子増幅の第一人者」を自負しておりましたから、すぐにこの仕事に乗り出しました。遺伝子増幅と考えられていたFISHシグナルがRNase によって見事に消化されることを見つけ、多くの研究者がprimary RNAを遺伝子DNAと見誤っているのだと気づいたときの興奮は忘れがたいものでした。

研究生活を支えてくれるものは発見との出会い以外に人との出会いがあると思います。振り返ってみますと、壁にぶち当たったときに、いつも誰かが手を差し延べてくれ、幸運な研究生活であったと思います。私は昭和29年1月に、金沢の下町に生まれ、小中高を地元の学校に通い、大学も金沢大学でした。ニューヨークのブロンクスで過ごした2年半と山梨医大に赴任した7年を除けば、人生の大半を金沢で過ごし、仕事の大部分も金沢大学で成し遂げたものです。北陸の天気と金沢人の性格が嫌いだという人にたくさん会ってきましたが、私はどちらも、また母校も大好きです。今後の母校の発展を願ってやみません。

金沢大学医薬保健研究域医学系
小児科学
谷内江昭宏

この度、平成31年3月末を持ちまして、小児科学主任教授を退任となります。十全同窓会会員の皆さまにおかれましては、長年にわたりご指導、ご鞭撻を賜りましたこと、心よりお礼を申し上げます。

私は昭和29年2月に石川県輪島市に生まれ、石川県立輪島高校を卒業後、昭和47年4月に金沢大学医学部に入学しました。昭和54年3月に大学を卒業後、小児科学教室に入局しました。臨床の傍、谷口昂教授や宮脇利男講師の指導の下で大学院生として発達免疫学の研究に関わることになりました。

大学院を卒業してすぐに、NIHのポスドクとして留学する機会が与えられました。後に世界初の遺伝子治療を行うことになるRM Blaese博士の研究室で、CMVに対するT細胞免疫応答に関する仕事と、レクチン刺激によるT細胞活性化に関する仕事をまとめることができました。

帰国後、4つのテーマを研究の柱としました。その第一は、原発性免疫不全症の診断と病態解析です。特にOmenn症候群では免疫不全と強い炎症という一見矛盾する病態が、T細胞分化の障害と自己応答性T細胞クローンの増殖・活性化により惹起される可能性を明らかにしました。一連の研究と診療の過程で、世界で3番目となる好中球二次顆粒欠損症症例を見出しました。第二は、EBV関連リンパ増殖症の診断と病態解析についての研究です。EBV感染症研究会の世話人として研究会の運営に貢献すると同時に、EBV感染症の病態解析を続けてきました。第三は偶然遭遇し世界初の報告となったヘム・オキシナーゼ1（HO-1）欠損症の発見とその病態解析、HO-1の炎症抑制・細胞保護機能に関わる一連の仕事です。偶然の出会いをきっかけに、国内外の優秀な研究者と知り合いになれたことは大きな収穫でした。第四がサイトカイン解析を駆使した炎症病態の評価、特に全身型若年性特発性関節炎（sJIA）の病態解析です。一連の研究により、高いIL-18値の持続が二次性のNK機能障害を惹起し、マクロファージ活性化症候群を誘発する可能性を明らかにしました。

教育の面では、平成9年から11年間、医学部保健学科検査技術科学専攻教授として教育・実習に関わりました。この間に行った系統的な免疫学の講義、実習は自分自身にとっても大変有益な経験となりました。平成20年より小児科主任教授を拝命し、これまでの研究に加えて、学生教育、研修医教育さらに地域医療のさまざまな局面での役割が期待されるようになりました。不足する小児科医、少子高齢化、過疎化による集約へ向けての期待など、実に多くの課題が山積していました。

附属病院に関わる仕事として、医療安全管理責任者としての体制整備の仕事、病院臨床倫理委員会ならびにClinical Ethics Consulting Team（CECT）の立ち上げ、Child Abuse Prevention System（CAPS）の整備などがあります。いずれも困難ですがやりがいがあり、その整備の一端に関わることができたことも嬉しく思います。

平成27年の第25回日本小児リウマチ学会、平成29年の第49回小児感染症学会、そして平成31年の第122回日本小児科学会と、全国学会を三度にわたり主催させていただきました。直接支援していただきました医局スタッフのみならず、同門会、十全同窓会の皆さまにお礼を申し上げます。

振り返ってみますと、やりたいことの一部しかできず、ましてや、やらなければいけないことはその多くができない、足らないことばかりの11年間でした。それでもなお、幾らかの仕事を成し遂げ、次に繋げることができたのであれば、大変光栄であり幸せなことかと思います。

終始私自身と教室のスタッフを励まし、指導してくださいました、十全同窓会員の諸先輩に改めて感謝してご挨拶といたします。

退職記念講演会

日時／平成31年1月23日（水）
平成31年3月4日（月）
場所／金沢大学医学類G棟2階第3講義室

平成31年1月23日（水）ならびに平成31年3月4日（月）、本年3月末日をもって医学系教授をご退職された大井章史教授、三邉義雄教授および谷内江昭宏教授の退職記念講演会が医学類G棟2階第3講義室で開催されました。

記念講演会において、大井章史教授は「Read Cancer Autobiography」、三邉義雄教授は「子どものこころの社会実装研究：文理融合・産学官共同・国際交流を目指して」、谷内江昭宏教授は「Ending the Diagnostic Odyssey―希少疾患診断の旅―」と題して40年余にわたる研究・診療・教育活動・管理職としてのお仕事を振り返られました。記念講演会には多くの教職員、十全同窓会員、学生が参加し、熱心にご講演に耳を傾けました。

大井章史教授は昭和54年本学医学部医学科を卒業され、昭和58年大学院博士課程を修了されました。金沢大学医学部病理第一講座助手、国立がんセンター勤務、金沢大学がん研究所外科助手を経て、平成2年～3年文部省在外研究員として米国モンテフィオレ医学センターに留学されました。平成6年9月金沢大学医学部病理第一講座助教授から平成10年4月山梨医科大学病理学講座第一教室教授、平成17年4月金沢大学大学院分子細胞病理研究分野教授に就任されました。平成21年から2年間金沢大学病院病理部長兼任さらに、平成25年から合計4年間金沢大学附属病院病理診断科長も兼任され、附属病院での臨床病理に多大なるご貢献をされました。卓越したリーダーシップのもと、首尾一貫して内分泌腫瘍病理学の発展に多大なるご貢献をされてこられました。「40年間の研究生活を振り返って、思い出に残る仕事と、人との出会いについて語らせていただきます。」と前置きされてご講演を開始されました。国立がんセンター、金沢大学がん研究所外科時代に内分泌腫瘍病理を学ばれる様になった経緯、病理第一講座助教授時代にライフワークとも言えるFISHに精魂傾けたことを和やかにお話しされました。山梨医科大学にて精力的にご研究されたHER2の成果を話されるうちに、タイトルである「Read Cancer Autobiography」の意味が腑に落ちる内容でした。ユーモアを交えて、先生の素晴らしいご業績のエッセンスをお話しされ、笑顔が溢れる素晴らしいご講演でした。

三邉義雄教授は昭和53年に本学医学部医学科を卒業後、金沢大学大学院医学研究科博士課程を修了されました。富山医科薬科大学精神神経医学教室助手を経て、平成元年New York州立大学Stony Brook校精神科リサーチアソシエイトとして留学されました。帰国後、浜松医

科大学附属病院精神科神経科講師を経て、平成18年11月に金沢大学大学院精神行動科学教授に就任されました。合わせて、金沢大学附属病院神経科精神科科長、金沢大学子どものこころの発達研究センター長、大阪大学連合大学院小児発達学研究科金沢大校教授の要職もお務めになりました。広く、深い神経科精神科領域の臨床活動とともに、卓越したリーダーシップのもと、複数の文理融合・産学官共同・国際交流を特徴とする大型研究を統率されてきました。ことに、医学・看護学、特殊支援教育学、臨床心理学、ロボット工学、数学などの若手研究者からなる、文理融合研究チームをまとめ、先進的な研究課題の推進とその医療への応用、多くの優秀な若手を育成されました。ご講演のタイトルにもある、社会実装に向けて先駆的な取り組みを展開されています。ことに、「子どものこころ」は、「人間とは何か」、「人間らしくなるとは何か」や「挙子育児」という重要なテーマを包括させ、その新たな学問領域の創生とその実装に多大なご貢献をされました。宝町キャンパスにおける学生や職員の心の問題に精神的な支柱として大きく貢献されてこられたことも特筆すべき点です。これまでの先生の国際的、学際的な共同研究の多大な成果をお話され、今後の課題をも示していただいた素晴らしいご講演でした。

谷内江昭宏教授は昭和54年、本学医学部医学科を卒業し、米国国立衛生研究所に留学されました。帰国後、本学小児科学助教授を経て平成9年4月に本学医学部保健学科教授に就任され、平成20年4月金沢大学医学部医学科教授に就任されました。卓越したリーダーシップのもと、首尾一貫して小児科学の教育、発達免疫学、臨床感染症学、炎症性疾患の臨床、研究に努めてこられました。遺伝的要因に基づく原発性免疫不全症の病態解明をライフワークとして多大な成果をあげておられます。さらに、EBV関連血球貪食症候群発症早期の鑑別診断と早期治療介入のための提言を行い、ガイドライン作成にも大きく貢献されました。これらにより平成23年5月、石川テレビ賞を受賞されました。また、平成29年に第49回日本小児感染症学会、平成27年には第25回日本小児リウマチ学会、平成31年4月に第122回日本小児科学会学術集会を主催されました。ことに、平成元年に経験した症例を契機として、ヘムオキシゲナーゼ1欠損症を世界で初めて発見され、世界的にも高い評価を得ております。希少疾患の病態解析も力を注がれ、北陸IRUD（Initiative on Rare and Undiagnosed Diseases）診断委員会の代表を務めてこられました。さらに地域医療の充実にも精力的に取り組まれるとともに、学長補佐（研究担当）ならびに副病院長（医療安全担当）として本学に貢献されました。子どもへの温かい視点の元、希少疾患の解明と治療にかける先生の熱意を感じる素晴らしいご講演でした。

万感の思いのこもった素晴らしい最終講義を拝聴し、出席者は先生がたのご業績の数々、お人柄に思いを馳せながら感銘を受けていました。余韻が残る中、長年のご功績をたたえ、盛大な拍手とともに花束の贈呈が行われました。

（和田　隆志：記）

受　　賞

第22回 秩父宮妃記念 結核予防功労賞受賞

石崎　武志
（昭和49年卒業）
能登北部呼吸器疾患センター
公立穴水総合病院

この度、平成31年2月28日、東京椿山荘で開催された第70回結核予防全国大会（結核予防会創立80周年記念大会）式典会場で第22回秩父宮妃記念結核予防功労賞（事業功労賞、個人）を受賞しました。結核撲滅に深い関心を寄せられた結核予防会総裁の故秩父宮妃のご遺言で設立された本結核予防功労賞は結核予防事業に対する功績が顕著な団体、個人に毎年授与されるもので、現結核予防会総裁の秋篠宮妃殿下から親しく授与されます。今回は国際功労賞1名、団体功労賞1事業所、保健看護功労賞2名、個人3名の1団体、6個人でした。前日27日の大会レセプションに秋篠宮妃紀子様もご参加され、親しくお話しできる機会をいただきました。自己紹介とどんな仕事をしてきたかの説明をにこやかにお聞きになり、「これからも身体をいたわりご活躍ください」とお言葉を賜りました。翌朝、秋篠宮妃殿下と受賞者との記念撮影を終え、式典会場に赴いたところ、事前に聞いていなかった平成天皇皇后両陛下が行幸啓されるとのことで、会場内に緊張感が走りました。最前列の受賞者席に着き、お待ちすること15分、まず、秋篠宮妃殿下がご臨席され、そのしばらく後、両陛下が会場に入ってこられました。私は、受賞者の中で一番若かったせいか席が端でした。それが幸いし、秋篠宮妃殿下並びに両陛下が1mほど近くを軽く会釈されながら通られるという思わぬ幸運に恵まれました。

慢性感染症の結核・抗酸菌症の治療は長期に渡り、患者さんのQOLを著しく損なうので、医師のみではなく看護師・保健師・薬剤師・検査技師なども含むチーム医療が求められます。その非医師向けの抗酸菌エキスパート制度の発足と日本結核病学会総会時の継続的エキスパート集中セミナー開催や院内・地域DOTŞの改定などに微力を注ぎ、現在、地域医療の中で結核・抗酸菌感染をふくむ呼吸器疾患ケアの相談を受けているなどの教育・啓発活動を評価されたと関係各位に感謝しております。

秋篠宮妃殿下と受賞者（筆者：後列右）

はあざみ女性研究者賞 平成30年度中村賞受賞

松井　三枝
（特別会員）
金沢大学国際基幹教育院 GS教育系
金沢大学大学院医薬保健学総合研究科
臨床認知科学

この度、平成25年度に創設された女性研究者の成果に対する「中村賞（金沢大学女性研究者賞）」を賜り、誠に光栄に存じます。中村賞の名称は、金沢大学第10代学長中村信一先生のご支援に由来するということです。平成30年12月1日に金沢歌劇座で授賞式があり、当日は「精神神経疾患の認知機能―心理学と医療の架け橋としての神経心理学―」と題して講演させていただきました。

私は、富山大学医学部（旧富山医科薬科大学）に約29年間勤め、母校である金沢大学に異動して2年余りたったところです。精神医学教授倉知正佳先生のもとで、さまざまな精神疾患や神経疾患の方への神経心理学や臨床心理学の仕事に携わってきました。研究としては、当時精神医学教室の主要テーマとされていた統合失調症への生物学的アプローチに加わり、認知機能障害についての解明のために、認知機能検査・眼球運動などの精神生理学的検査や脳画像を用いた検討を行なってきました。認知機能障害の特徴をいくつか明らかにし、最近では、認知リハビリテーションの開発にも取り組み、その効果の検証もしてきました。途中、ペンシルバニア大学のGur教授のもとで、神経心理学や脳画像研究をさせていただいた経験は私の大きな財産になっています。

最近は、統合失調症に限らずいろいろな精神神経疾患の発症後の神経可塑性や回復力を考えるとともに、その人が発症する前に元々持っているリソース、すなわちライフコースの中での教育や仕事の経験、余暇活動、病前の知能などを認知予備力としてみていき、そのことによって個人差をよりよく捉え、予後の予測など臨床に役立つ検討をしたいと思っております。今後の課題としては、生涯発達を加味した神経疾患・精神疾患の認知機能・脳機能の検討であり、超高齢社会に対応した関連領域とのネットワークを構築し臨床医学研究に貢献したいと思っております。今後ともよろしくお願い申し上げます。

はあざみ女性研究者賞
平成30年度若葉賞受賞

竹下有美枝
（平成12年卒業）
金沢大学附属病院内分泌・代謝内科

はあざみ賞は2013年度に創設された女性研究者の優れた成果を讃える「中村賞（金沢大学女性研究者賞）」から2017年度に「はあざみ女性研究者賞」に発展しました。中村賞の名称は、金沢大学第10代学長の中村信一氏からご寄付の支援を受けたことに由来しています。今回、私は、2019年度はあざみ女性研究者賞若葉賞を受賞しました。とても光栄なことと感じています。

私は、現在、非アルコール性脂肪性肝疾患と代謝疾患との関連について研究しています。コレステロール吸収阻害薬エゼチミブは、動物レベルでは、脂質をはじめ、糖代謝や肝病理を改善することが報告されていました。私は、ヒトでの前向きランダム比較試験を実施し、肝生検サンプルの脂肪酸組成ならびに遺伝子発現プロファイルの検討を行うことによって、エゼチミブが糖代謝を悪化させることを明らかにしました。この結果は、エゼチミブという脂質代謝にかかわる薬物が、ヒトでは糖代謝を悪化させるという、肝臓代謝の複雑な制御を世界で初めて明らかにしたものとなりました。また、この研究の発現解析のイメージはDiabetologia 57巻のカバーに採用されました。

2016年、WHO本部のグローバル肝炎部門に赴任し、「GLOBAL HEPATITIS REPORT,2017」を発表する機会を得ました。WHOでは、トップを務めるのが女性であるだけでなく、女性の職員が多く働き、優れた成果を挙げていました。そこでは、パワハラやセクハラといった女性が受けやすいハラスメントを見たり感じたりすることはなく、男性も女性も生き生きと仕事をしていました。WHOが効率的に多くの成果を挙げている様子とあわせ、職場における女性と社会についても考えることが多くありました。そうしたなか、このような賞をいただいたことは、金沢大学の女性研究者として、私にも大きな励みとなります。

今回の受賞にあたり、基礎・臨床のさまざまな面でご指導賜りました金子周一教授、篁俊成教授をはじめ、支えていただきました国内外の皆さまに深く感謝いたします。十全同窓会の先生方におかれましては、今後ともご指導ご鞭撻いただきますようよろしくお願いいたします。

はあざみ女性研究者賞
平成29年度紫花賞受賞

佐々木素子
（昭和63年卒業）
金沢大学医薬保健研究域医学系
人体病理学

2017年12月に、はあざみ女性研究者賞紫花（しか）賞を受賞しました。この賞は、金沢大学等の女性研究者を顕彰する制度で、平成25年度創設の「中村賞（金沢大学女性研究者賞）」を発展させ、平成29年度より「はあざみ女性研究者賞」（中村賞、紫花賞、若葉賞）として創設されたものです。

私は、肝胆道系疾患の病理学的研究を一貫して続けてきました。特に、難治性肝胆道系疾患である原発性胆汁性胆管炎（PBC）の病態形成に胆管細胞老化、オートファジー異常が関与することを世界で初めて明らかにしました。PBCの病態に重要な役割を持つ老化胆管細胞を標的にすることで、画期的な診断や老化細胞除去療法など新しい治療法の開発につながるのではないかと考えて、さらに研究を進めております。また、①肝癌・胆道癌の多段階発癌機構と細胞老化、②アルコール性肝硬変に発生するSerum amyloid A（SAA）陽性肝腫瘍の発見と臨床病理学的意義の検討、③混合型肝癌・細胆管癌の臨床病理学的・分子病理学的解析など、さまざまな角度から、肝癌、胆道癌の臨床病理学的研究にも携わってきました。病理組織学的解析と遺伝子異常など分子病理学的解析を融合した包括的研究を目指しています。

医学研究、医学教育における病理学の立ち位置、臨床における病理学の役割

受　　賞

は、時代とともに変遷しています。現在、ゲノム関連医療やAI関連医療に関して、また新たな病理学の役割が求められています。続けてきた研究を通して、時代に即した新しい病理学の発展や後進の育成に、微力ながら貢献できればと思います。

今回の受賞にあたり、中沼安二名誉教授はじめ同門の先生方に深謝いたします。また、十全同窓会の先生方におかれましては、今後ともご指導ご鞭撻の程、どうぞよろしくお願い申し上げます。

はあざみ女性研究者賞
平成29年度若葉賞受賞

清水　美保
（平成7年卒業）
金沢大学保健管理センター
金沢大学附属病院腎臓内科

この度、「糖尿病性腎症ならびに糖尿病性腎臓病の臨床・病理学的研究」のテーマで、はあざみ女性研究者賞2017年若葉賞を賜りましたこと、大変光栄に存じます。

糖尿病に合併する腎障害は多様化しており、典型的な臨床経過・症候・病理学的特徴を有する“糖尿病性腎症”に加えて、非典型的な糖尿病関連腎疾患を含む“糖尿病性腎臓病”の概念が提唱されております。さらに、糖尿病性腎症ならびに糖尿病性腎臓病は、腎予後のみならず、心血管系疾患の発症や生命予後の観点からも、医学的かつ社会的に重要な課題となっております。

今回の受賞対象となった研究は、日本腎臓学会公的研究班（研究代表者　金沢大学大学院腎臓内科学　和田隆志教授）の研究課題に関連して遂行いたしました。２型糖尿病に伴う糖尿病性腎症の組織機能連関と長期予後に関する検討では、腎予後・心血管系疾患の発症・生命予後に影響する腎病理所見の解析に加えて、近年増加している顕性アルブミン尿を伴わない腎機能低下例の病理学的特徴と予後を示し、米国糖尿病学会誌「Diabetes Care」等に報告いたしました。また、日本腎臓学会・腎臓病総合レジストリーの二次研究「糖尿病性腎症例を対象とした予後、合併症、治療に関する観察研究（Japan Diabetic Nephropathy Cohort Study：JDNCS）」では、本邦の2型糖尿病に伴う糖尿病性腎症ならびに糖尿病性腎臓病の診療実態調査、横断・縦断研究を継続し、その成果を日本腎臓学会の公的研究班合同発表会および学会誌等で報告いたしました。

今回の受賞に際し、直接のご指導と本賞へのご推薦を賜りました和田隆志教授、貴重なご指導・ご助言を賜りました金沢大学大学院消化器内科学 金子周一教授、金沢大学大学院内分泌・代謝内科学 篁俊成教授、金沢医科大学腎臓内科学 横山仁教授をはじめ、研究を支えていただきました学内外の皆さま方に深謝いたします。十全同窓会の先生方におかれましては、今後ともご指導ご鞭撻を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

The 136th Congress of the German Society of Surgery Scholarship受賞

林　　憲吾
（平成23年卒業）
金沢大学先進総合外科
石川県立中央病院消化器外科

この度日本外科学会国際委員会の推薦を得てミュンヘンで開催された第136回ドイツ外科学会への参加・発表の機会を得た。本学術交流制度は、日本・ドイツ・アメリカ外科学会で互いの学会から推薦された40歳以下の若手外科医を1名ずつ招聘して学術発表の機会を与える交流であり、非常に有意義な経験をさせていただいた。

学会前日にはPresident’s dinnerが開かれ、光栄なことに私の下にもInvitationが届いたためタキシードを持参し参加させていただいた。参加者は歴代のドイツ外科学会のPresident夫妻が主であったが、気さくに声をかけてくださり、美味しい食事とワインとともに話にも花が咲いて夢のような時間であった。学会のセッションはほとんどがドイツ語であったが、英語で行われているものもいくつかあったのでそれらを中心に聴講した。日本には馴染みの薄いterrorismに関連した外傷の対応に関するセッションが印象的であった。学会3日目には日本とドイツの joint sessionが大ホールにて行われた。同セッションでは学会の国際化などが主なtopicであったが議論は大いに盛り上がり、こうした討論を通じて互いを高めあう両学会のつながりを肌で感じることができた。私は直腸癌に対する腹腔鏡下側方リンパ節郭清術の成績について報告したが、欧米とは治療法が異なることもあり興味をもって聞いていただけたようで、発表の後に大きな拍手をいただき安心した。

この度推薦してくださった当医局の竹村教授、また今回の応募の後押しをしてくださった順天堂大学外科先任准教授稲木先生に誌面をお借りして心よりのお礼を申し上げます。この経験を今後の臨床・研究に還元できるよう邁進いたします。

医師国家試験結果

第113回医師国家試験の結果が平成31年3月18日に厚生労働省より発表されました。金沢大学の新卒者と既卒者を合わせた全受験者の合格率は95.5％でした。国立大学43校中、昨年は1位でしたが今年は3位でした。また、全国80医学部中では第9位でした。全国の平均合格率は89.0％（受験者総数1万146人中、合格者9029人）で、これは前年度より1.1ポイント低い数値でした。ちなみに、今回は新卒者、既卒者合わせた合格率100％はなく、自治医大の99.2％が最高でした。新卒者に限っても、合格率100％は1校のみでした。さらに金沢大学の合格者数は107名でした。新卒者、既卒者の内訳は、新卒者106名中、102名が合格、既卒者は6名中、5名が合格でした。新卒者に限ると、96.2％であり、全国平均92.4％より高くなっております。

今回、新卒者、既卒者合わせて5名が不本意な結果に終わりました。次回の捲土重来を期待しております。現在、学生支援委員長、医学教育研究センタースタッフはじめ教職員一丸となって、学生へのきめ細かい対応も継続かつ強化しております。全員が6年間で卒業し、かつ医師国家試験にも揃って合格することを期待しております。

現在、医学類をあげて精力的かつ緻密な教育改革を行い、教育環境の一層の整備と醸成を図ろうと努力をしております。この中で、Post-CC OSCEのトライアルも行なっています。また、6年次に統合臨床試験を2回実施し、卒業判定に重要な役割を果たしております。今年から、国際認証を目指し、拡大された臨床実習も始まります。引き続きまして、医学類の教育理念、教育目標にそった医師の育成にあたりたいと思います。

（和田　隆志：記）

第113回医師国家試験結果　※（　）内は第112回結果

	受験者	合格者	不合格者	合格率	全国平均
平成31年3月卒業者	106名（120名）	102名（116名）	4名	96.2%（96.7%）	92.4%（93.3%）
平成30年3月以前の卒業者	6名（5名）	5名（4名）	1名	83.3%（80.0%）	56.8%（63.9%）
合　計	112名（125名）	107名（120名）	5名	95.5%（96.0%）	89.0%（90.1%）

お知らせ

金沢大学医学部十全同窓会
会員情報変更サイトを
ご活用ください

URL　http://juzen-ob.w3.kanazawa-u.ac.jp

LOGIN情報は、事務局より各会員あてに郵送でお知らせしております。
ご不明な点は事務局までご連絡くださいますようお願い申し上げます。
TEL：076-265-2132
Email：juzen@med.kanazawa-u.ac.jp

十全学術行脚 第28回 | 東京女子医科大学 |

1. 内潟　安子　特任教授（昭和52年卒業）

東京女子医科大学東医療センター病院長
金沢大学医学部十全同窓会東京支部長

母校で谷口昴教授、佐藤保先生の薫陶を受け、富山医科薬科大学（現富山大学医学部）で岡本宏教授、山本博先生（現公立小松大学学長）の薫陶を受け、その後は米国ＮＩＨで研究と生活を満喫し、昭和62年から東京女子医科大学糖尿病センターで、特に最後の6年間はセンター長・主任教授として充実した日々を送り、平成28年定年を迎えましたが、ただちに同大学東医療センター病院長を任命され、特任教授としてまた充実した日々を送っております。

毎夏は埼玉、千葉、神奈川、茨城、東京の各支部合同で関東拡大支部総会を楽しく開催しています。

2. 布田　伸一　教授（昭和55年卒業）

東京女子医科大学大学院医学研究科
重症心不全制御学分野

卒業して39年が過ぎました。医学生のときに躍動的な心臓に魅力を持ち、次々に出てくる新薬、検査を駆使することに喜びを感じました。そのような発展の陰で残されていたものが心移植でしたが、昭和42年のヒトにおける第1例目から半世紀が経ち日本も欧米に近づきました。長かったこの時間は決して無駄ではなく、自分は、ドイツ、米国留学も経験し、さまざまな勉強をさせていただき、今では心臓移植の臨床および研究の毎日です。移植対象の重症心不全の管理から移植後の拒絶や感染症、腎障害、悪性腫瘍、移植心冠動脈病変、等の管理を自分のような内科医が中心になって行うことは今では周知のことです。「移植」は新たな人生に再出発するための切符です。「生」と「死」、それを結ぶ「人生」、、、そこにうごめくさまざまなものが絡み合い、時にはその「人生」を傷つけることもあります。医療に携わる多くの者は、患者やその家族を幸せにしたいと思っています。「移植」医療体験は、そんな私たちに答えを導き出すものと思っています。

3. 鳥居　信之　臨床教授（平成元年卒業）

東京女子医科大学附属成人医学センター
消化器科

私は平成元年に卒業後、東京女子医大消化器内科に入局し、肝臓病を中心とした臨床と研究を続け、昨年より成人医学センターに赴任しております。その間米国NIHへも留学し、同時期に金沢大学より水腰英四郎先生（平成4年卒業）も留学されており、一緒に研鑽させていただきました。現在は成人医学センターで消化器内科一般に診療し、肝がんはもとより最近増えてきている膵がんや大腸がんの早期発見に努めています。当センターより、冬になると雪をかぶった富士山を見ることもできますが、雪を見ると金沢での学生時代を思い出し、気分を新たに診療に励んでおります。

4. 古谷　武文　非常勤講師（平成2年卒業）

東京女子医科大学病院
膠原病リウマチ内科

卒業後、当科に入局しました。以来25年間、米国留学（NIH）、講師、医局長などを経験させていただきま

した。2年前に父の診療所を継承し、現在は非常勤講師として、週1回の専門外来を行っています。IORRAコホートという大規模コホート研究と出会い、関節リウマチ患者における骨粗鬆症の臨床研究を行い、これまで英文原著論文を20報報告しました。「骨粗鬆症の予防と治療ガイドライン2015年版」では、私の考えを書かせていただきました。研究は趣味となっており、現在も女子医大の整形外科の先生方と臨床研究を継続しております。

5. 三浦順之助　准教授（平成4年卒業）
東京女子医科大学病院糖尿病センター
糖尿病・代謝内科

私は卒業後、内科学第一教室（小林健一教授）で初期研修を行いました。平成6年、東京女子医科大学糖尿病センター（大森安恵教授）に移り、内潟安子教授（現同東医療センター病院長）の元で、1型糖尿病の血管合併症の研究に従事しました。その際には、生化学第二教室の山本博前教授にご指導賜りました。学位取得後、平成13年から米国NIHで1型糖尿病の発症に関する研究に従事し、平成16年帰国後、主に若い糖尿病患者さんの診療を担当し、臨床研究を行っています。日本一の患者数のデータで日本を代表する臨床的意義を発信していきたいと思っています。

6. 吉澤　浩志　講師（平成4年卒業）
東京女子医科大学病院脳神経内科

卒業後東京女子医大に入局し、現在まで脳神経内科における認知症／高次脳機能障害学および画像診断科における脳核医学の研鑽に努めてきました。思い返せば大学3年の時に神経解剖学・生理学の講義で複雑で深淵な脳神経に魅せられ、5年生の臨床実習では神経精神医学講座小山善子助教授（当時）から神経心理学を、核医学講座松田博史講師（現国立精神神経センター）から脳機能を観る核医学という方法論を教えていただきました。現在の私の臨床、研究の根幹はまさに学部生のときに確立したと言えます。そして膨大な臨床症例を抱える女子医大の強みを活かして、現在では東医療センター病院長の内潟安子先生や同期である糖尿病代謝内科の三浦順之助先生らとの糖尿病・認知症コホート研究や、金沢大学臨床認知科学松井三枝先生との共同研究など、活動の場が東京にありながら、なお金沢大学同門の幅広いネットワークのありがたさを日々実感しています。

7. 星野　英久（平成7年卒業）
東京女子医科大学八千代医療センター
呼吸器外科

卒業後、千葉大学肺癌研究施設外科（現在の呼吸器病態外科学）教室に入局し、大学・関連病院にて肺がんの外科治療や気管支鏡検査・治療を中心に研鑽を積んでまいりました。平成20年に千葉大学医学部附属病院に戻り、呼吸器病態外科学助教・講師を経て、平成23年10月よりさいたま赤十字病院、成田赤十字病院で勤務した後、平成30年4月より東京女子医科大学八千代医療センターに赴任いたしました。新たに保険収載されましたロボット支援下手術を経験する機会も得、これからも挑戦する意欲と謙虚な心で診療・教育に努めてまいりたいと考えております。

8. 藤田　泉（平成13年卒業）
東京都保健医療公社荏原病院

卒業後、同期の佐藤先生と一緒に、東京女子医大消化器外科へ入局し、診断から治療までという方針のもと、術前検査から手術手技、周術期管理、術後の化学療法まで消化器疾患に関わるありとあらゆる臨床研修をさせていただきました。また、先端生命医科学研究所にて膵臓の研究に従事し、その際金沢大学OBの内潟先生（現東医療センター病院長）にも大変お世話になりました。現在は東京都保健医療公社荏原病院に出向し、外科・救急業務全般をこなしつつ、諸先輩から指導いただいた経験を生かし地域医療および外科研修医の育成に励んでおります。

9. 花岡　成典（平成15年卒業）
東京女子医科大学病院
膠原病リウマチ内科

金沢大学を平成15年に卒業後、東京都の小豆沢病院で初期・後期臨床研修を修了し、平成20年に東京女子医科大学附属膠原病リウマチ痛風センターに入局いたしました。関連病院での勤務を経て、現在は当院膠原病リウマチ内科で病棟の指導を行いつつ、リウマチ性疾患の肺病変についての臨床研究を行なっております。日本最大級のリウマチセンターとして、整形外科、小児リウマチ部門とも連携を行いつつ、日本のリウマチ診療を牽引できるよう研鑽に努めてまいります。

10. 老谷　嘉樹（平成19年卒業）
東京女子医科大学東医療センター小児科

平成19年に金沢大学を卒業後、2年間の臨床研修を終え東京女子医科大学東医療センター小児科に入局しました。初期研修時代から当院でお世話になっておりますが、東京女子医大では金沢大学出身の先生方がさまざまな科で活躍しており心強く思いました。平成25年に小児科専門医を取得し、平成28年からは国立精神・神経医療研究センター病院小児神経科で2年間勉強させていただきました。学生時代に教えていただいた神経解剖の知識を生かし、今後は小児神経の発展に寄与していく所存です。

病院紹介

市立輪島病院

市内唯一の病院

市立輪島病院は昭和20年2月に日本医療団輪島病院として開設され、以後約73年にわたり輪島市内唯一の総合病院として地域に根ざした医療を提供してきています。

平成11年4月より199の病床数で運営を行っていますが、輪島市の抱える少子高齢化（高齢化率43.5％）に伴う医療需要に即応するため平成28年10月より一般病床のうち51床を回復期にあたる地域包括ケア病床に変更したことにより、急性期から回復期及び慢性期までの総合的な入院体制を整えることができました。

このほか、地域柄4カ所のへき地診療にも力を入れており、特に輪島市の北方49kmに位置する舳倉島の診療所には1年を通して常勤医師1名を配置し島民や旅行者の医療を支えています。

心の通う医療サービスの提供と経営改善

こうした地域医療を支えるため、当院では「心の通う医療サービスの提供」を基本理念に掲げ、そのための基本方針として「質の高い医療の提供」や「患者中心の医療の推進」など5項目を定め、それらの実現に向けて職員一丸となって取り組んでいるところです。

一方で、継続的に地域医療を提供するためには、経営面を直視する必要があるため、平成29年3月に第3次市立輪島病院改革プランを策定し、院内種々のワーキンググループによる経営改善のための体制を構築いたしました。過疎化が進み外来患者の減少が避けられない中において、あえて高めに設定した病床稼働率81％や経常収支比率101％についても、昨年度実績ではそれぞれ80.5％、105.5％を達成することができ、職員のモチベーションの向上にもつながってきております。

地域包括ケアシステムへの積極的な取組み

当院では、地域包括ケアシステムの構築が謳われる以前の平成20年に当院医師により医療と介護の垣根を越えた連携の必要性が説かれ、2年後に市内全ての医療・介護事業所による「わじまケアネット」が立ち上がりました。今では率直に意見交換ができる関係になり、そのことが市民への切れ目のない医療・介護サービスの提供につながっています。

また、輪島市における地域包括ケアシステムを医療分野から支えるため、訪問診療や訪問看護などのほか、平成28年10月には地域包括ケア病棟を立ち上げるなど、このことに主体的かつ積極的に関わってきています。

しかしながら医師や看護職員などの慢性的な不足を抱えながら働き方改革の実現も目指さなければなりませんが、職員一丸となって乗り越えていきたいと存じますので、十全同窓会の皆さまのご指導・ご鞭撻を賜りますようお願いいたします。

（院長　品川　　誠：記）

概要

市立輪島病院

所在地	石川県輪島市山岸町は1番1地
病院長	品川　　誠
病床数	199床 （一般96、地域包括51、療養48、感染4）
診療科数	13

沿革

昭和20年2月	日本医療団輪島病院開設
昭和29年7月	輪島病院に改称
平成7年4月	市立輪島病院に改称
平成9年3月	新病院開業（現在地へ）

富山県厚生農業協同組合
連合会高岡病院

厚生連高岡病院

富山県西部で最も古い歴史と最大の規模を有する公的病院

厚生連高岡病院は、富山県西部地区（富山県では「呉西」と呼びます）の中核都市・高岡市の西部にあります。その始まりは、昭和11年10月1日、富山県購買販売利用組合連合会が現在地に「産業組合高岡病院」を10科で開設したことに遡り、富山県産業組合第一病院、富山県農業会第一病院、文厚連高岡病院、協同組合高岡病院、農協高岡病院への名称変更を経て、昭和50年に現在の病院名となりました。呉西地区で現存する他の公立・公的病院に先立って設立された当院は、規模でも地区では随一で、平成10年には一般病床681床を有していました。

平成31年4月現在、診療科数は33科で、救命救急病棟（ECU）8床、集中治療病棟（ICU）12床、NICU 3床、緩和ケア病棟16床、地域包括ケア病棟49床を含めて、一般病床533床を有しています。平成9年に救命救急センター、平成19年に地域がん診療連携拠点病院の指定を受け、「救急」と「がん」は当院の診療の2つの柱です。また、平成25年には地域医療支援病院の指定を受け、地域の医療機関との連携をさらに推進しているところです。周産期母子医療センター、災害拠点病院の指定も受け、地域における周産期医療、災害医療の拠点の役割も果たしています。

各診療部門の取り組み

救急部門は、呉西の三次救急を支える救命救急センターを独立診療科としての救急科が運営し、年間約3500件の救急搬送患者のすべての初期診療にあたるほか、併せて20床のECU/ICUで、救急入院患者、重症術後患者、院内急変等の対応を行っています。救急医療を支える画像診断に関しては、放射線科医がリアルタイムに専門医の読影レポートを返し、救急医療の質向上に多大な貢献をしています。

がん診療に関しては、外科系各診療科が多数の手術を手掛けており、特に大腸癌の腹腔鏡下手術の件数は特筆すべきものがあります。通院で化学療法を行う「外来治療室」を平成17年に開設、これは北陸地方でも最も早い整備でした。地域がん診療連携拠点病院の指定を受けて「総合的がん診療センター」（がんセンター）を設置し、腫瘍内科を開設しました。平成28年の緩和ケアセンター開設を機に、がんセンターは、「がん薬物療法」「放射線治療」「緩和ケア」「がん相談支援」の4つのサブセンターで構成することとしました。臓器別に診療チームを形成し、キャンサーボードで病院としての治療方針を決定するプロセスを重視しています。

内科領域は、以前から、金沢大学旧第一内科、第二内科、第三内科、神経内科のすべての内科系医局から医師派遣を受けている、金沢大学関連病院の中でも異色の存在でした。平成11年に内科系全病床を含む東診療棟が完成したのを機に、出身医局の壁を取り除いて臓器別の診療体制に移行しました。また、この度の金沢大学の臓器別内科診療体制への移行と時期を同じくして、内科を9つの標榜診療科（総合診療・感染症、消化器、循環器、糖尿病・内分泌代謝、腎臓・リウマチ膠原病、呼吸器、血液、腫瘍、脳神経）に専門分化させました。

当院の理念である「患者さんと職員が信頼・安心・満足できる病院」の実現のため、職員一同これまで以上に努力を重ねていきます。十全同窓会員の皆さまのご指導を今後ともよろしくお願いいたします。

（副院長　柴田　和彦：記）

概要

富山県厚生農業協同組合連合会　高岡病院

所在地	富山県高岡市永楽町5-10
開　設	昭和11年10月
病院長	北川　清秀
病床数	533床
診療科数	33

沿革

昭和11年	産業組合高岡病院として富山県高岡市の現在地に創設
昭和50年	厚生連高岡病院に名称変更
平成9年	救命救急センター指定、地域周産期母子医療センター認定
平成16年	電子カルテ導入
平成19年	高岡医療圏地域がん診療連携拠点病院指定
平成25年	地域医療支援病院指定

教 室 だ よ り

機能解剖学

研究

当教室では、日常よく経験する「痛み」という感覚のメカニズムを解明することを目指して研究を進めています。

1. 内臓痛のメカニズムの解明

内臓の痛みは頻度が高く臨床的にも重要ですが、いまだ不明な点が多いです。また、機能性胃腸症や過敏性腸症候群など明らかな病変が見られないにも関わらず痛みを伴う疾患も増えており、そのメカニズムの解明が急がれています。我々はさまざまな疾患モデルを用いて、疾患に伴う痛覚亢進のメカニズムの解明を目指しています。最近、糖尿病性の胃痛覚亢進にケモカインCCL2シグナルの亢進が関与していることを見出しました（Aye-Mon et al., Molecular Pain 2018）。

2. 血行障害性疼痛のメカニズムの解明

血行障害性疼痛は主に四肢に生じ、末端の血行障害によって生じる痛みで、その症状は、軽度のしびれから、間欠性跛行など日常生活に影響がでる場合までさまざまです。我々はその発症メカニズムについて解析しています。

3. 痛みの慢性化への移行メカニズムの解明と治療薬の探索

損傷や疾患など痛みの原因が取り除かれたにも関わらず、その後も長期に続く痛みを慢性痛と呼び、近年は慢性疼痛自体も一つの疾患としてとらえられるようになってきました。我々は急性痛から慢性痛への移行のメカニズムの解明とその予防・治療薬の探索を行っています。

4. 肉眼解剖学的研究

超音波診断に必要な運動器の解剖や、肉眼解剖学実習で遭遇した興味深い症例の解析など、肉眼解剖学的研究も進めています。

教育

2年時に「人体解剖学」の講義・実習を担当し、骨学、系統解剖学・局所解剖学の講義実習を行っています。放射線科や耳鼻咽喉科などのご協力のもと、臨床的な視点による講義・実習指導や、学外非常勤講師による最先端の研究を紹介する機会も設けています。また、御遺骨返還式・合同慰霊祭等の行事を通して篤志献体の理念や生命の尊厳の理解を促し、将来人の生命を預かる医師としての責任の重大さを認識させるよう努めています。

おわりに

解剖学教育は医学の専門知識を習得するために必修であるだけではなく、実習を経ることによる倫理面の教育の観点からも重要であると考えます。また、痛みは患者さんにとっては日常生活を送る上では深刻な問題ですので、治療法の解明を目指して研究を行っています。皆さまのご協力を得ながら、確かな知識と倫理観を備えた優秀な医師、医学研究者を育てていきたいと考えております。同窓会の皆さまには今後ともご指導、ご支援を賜りますようお願い申し上げます。

（奥田　洋明：記）

スタッフ

教　授　尾﨑　紀之
准教授　奥田　洋明
助　教　堀　紀代美
助　教　石川　達也
技術職員2名、事務補佐員1名、
大学院生5名

研究分野の沿革

教室の歴史は、明治34年、第四高等学校医学部が分立し金沢医学専門学校となり、石川喜直教授が第二解剖学教室を担当したところまで遡ります。その後、大正5年から佐口栄教授、同14年から岡本規矩男教授、昭和18年から石丸士郎教授、同35年から山田致知教授、同62年から田中重徳教授が教室を主宰しました。平成21年に尾﨑紀之が7代目の教授として着任し、現在に至ります。

医療経営学
（附属病院経営企画部）

概要

医療経営学講座は、附属病院経営企画部を組織的な基礎とし、所属する教員で構成されている医薬保健総合研究科の協力講座です。経営企画部は旧医療情報部から人員を引き継ぎ統合された組織で、所属する教員は、教授１名、医師・博士（医学）、特任助教（第２種）２名（M.Sc.（Information Science）、法務博士各１名）の合計3名です。急速に発達した情報技術を病院運営に導入するために設置された医療情報部を発展的に継承し、近年急速に複雑さを増した領域での病院運営を支援する機能を担っております。

教育、研究は、これらの業務に関連する領域で、医師などの医療従事者が医業経営の複雑化に対応しうるよう初歩的知識の付与を卒前、卒後教育を通じ行うとともに、関連領域での新しい知見の創出を限られた人的資源と研究資源の中で行っています。

教育

医療経営学講座では、医学類、薬学類学生に対して医事紛争に関係する初歩的法学教育および倫理に関する講義を担当するほか、医療における情報技術の応用、診療録他の医療記録に関する教育、診療報酬実務、処方データを用いたデータ分析方法に関する教育を行っております。このうち処方データを用いたデータ分析では、実際に匿名化された９万件の処方データを用いて学生にデータ分析を行わせ、定量的なデータの分析に必要な基本的情報スキルを付与しております。

研究

受療行動に関する研究（医療機関を選択する場面での、患者の選好に関する研究）として、インドネシアで国民皆保険制度が導入されることに伴う選好の変化を調査する研究を継続して行ってきております。国民皆保険制度の導入により医療資源の利用が変化するものと予想されますが、これを選好という視点で変化をきりとろうとする研究で、国民皆保険制度が導入される前後でしか観察しえない視点での研究です。

大規模医療データベースの構築と利用に関する研究として、処方・病名・医療行為に関するデータを複数大学で構築して分析を実際に実施する方法を確立する研究を行ってまいりました。この知見は、共同研究のパートナー企業を通じてNDBの構築に資しております。また、この研究を発展させたいわゆる「千年カルテプロジェクト」に加わり、医療データを用いた新たな医学的知見を発見する情報基盤の構築を進めております。

携帯電話など移動体通信の医療機器に対する影響に関する研究として、IoTの時代、在宅医療から病院医療までをシームレスに連携するための情報基盤として携帯電話網が利用されていますが、携帯電話網を利用するための電磁波が医療機器に対して影響を与えずに同一環境で両立して利用できるための技術開発を、NTTドコモ株式会社と共同して研究を行っております。

このほか、図書館情報学に関する研究、人工知能の医療への応用に関する研究などを行っておりますが、割愛させていただきます。

「病院」「医学部」「大学」という日本旧来の枠組みからは異色の機能を担った組織ではございますが、金沢大学の発展のために微力ながら力を尽くしてまいりたいと考えております。

（長瀬　啓介：記）

スタッフ

教　　授　長瀬　啓介
特任助教　山岡　紳介
特任助教　谷本　　舞
大学院生　２名

研究分野の沿革

1986年5月附属病院に医療情報部が院内措置により設置され、1992年4月に文部省訓令施設化され予算措置された。2008年 金沢大学大学院医学系研究科に協力講座として循環医科学専攻・医療経営学が設置された。2010年2月組織改組に伴い、教員の所属が附属病院医療情報部から附属病院経営企画部に変更された。医療経営学講座は医薬保健総合研究科社会環境医学領域の協力講座である。

支部だより

福井県支部

平成30年8月26日（日）に福井市のユアーズホテルにおいて（福井市支部担当）、第69回の金沢大学医学部十全同窓会福井県支部総会が開催されました。天候にもめぐまれ、総勢44名の先生方にご参加いただきました。

14時30分より総会が、柏原謙悟福井市支部副支部長の司会で開催されました。まずこの1年間で亡くなられた11名の会員に対し黙祷がささげられました。次いで森田信人福井県支部長よりご挨拶をいただきました。続いてご来賓の中村信一同窓会会長からご挨拶をいただきました。表祝に移り、堀川利彦先生、伊藤治英先生の傘寿祝を行いました。

続いて議事に移り、平成29年度の会務報告ならびに福井支部会員数、会費納入状況について報告がありました。協議事項として平成30年度会務計画（案）、平成29年度会計収支決算報告および特別会計報告がありました。平成30年度の会計収支予算（案）、特別会計報告がありいずれも承認されました。また十全同窓会福井県支部だよりの投稿依頼もありました。

その後は金沢大学大学院医学系研究科内分泌・代謝内科学分野教授の篁俊成先生の「日本人とは？ー糖尿病の病態から考えるー」という演題で特別講演を賜りました。石川県民は非肥満で血糖が高め？年齢別HbA1cは上昇し石川県は全国4位であるという興味深い出だしで講演がはじまりました。インスリン抵抗性の責任臓器は？という内容に続き、ヘパトカインの役割とその制御について非常にわかりやすく教えていただきました。ヘパトカインの中のセレノプロテインPが骨格筋にどのように作用するか、インシュリンとの関係、糖尿病との関係など、最新の知識とともに教えていただきました。内科以外の先生方にも非常にためになる有意義な講演でありました。

講演会終了後は、恒例の懇親会が盛大に開催されました。福井市支部副支部長の早川幸紀先生の司会のもと、福井市支部副支部長の田中延善先生、福井市支部支部長の岡田忠彦先生の開宴の挨拶のあと飯田和質先生の音頭で乾杯をしました。ギター演奏者の斎藤慶太さんのすてきな音色のギターで「主よ、人の望みの喜びよ」「カヴァティーナ」など6曲の演奏がありました。終始和やかな雰囲気で会話もはずみ、楽しいひと時を過ごしました。

（宗本　義則：記）

福井市支部

平成30年6月26日（火）午後7時より、ユアーズホテルフクイにおいて平成30年度の福井市支部総会が開催され、支部会員30名が参加されました。

柏原謙悟副支部長の司会で、まず本年度物故会員の故中川幾一郎先生、故高山茂先生、故田中孝先生、故小林喜順先生、故津田利雄先生のご冥福を祈り黙祷をいたしました。

岡田忠彦福井市支部長の挨拶の後、議事の報告に入りました。平成29年度の会務報告および年度別福井市支部会員数と会費の納入状況についての報告がありました。

続いて協議事項の検討が行われ、平成30年度の会務報告（案）、平成29年度の金沢大学医学部十全同窓会福井市支部収支決算が報告され、山内茂樹監事より監査報告があり、承認されました。続いて平成30年度の予算案が報告され、福井市支部担当の福井県支部総会の詳細（当日の役割分担等）について協議されました。

続いて上田隆夫先生の座長で、福井県立病院麻酔科長の我喜屋 徹先生により「最新の麻酔科学」と題して講演がありました。麻酔の歴史さらに最新の麻酔薬等について簡潔、丁寧に説明していただきました。100％の麻酔薬がない中、幾多

の麻酔薬を使い分ける－大変な作業だと感じ入りました。講演の最後に「麻酔がトラブルなく安全に施行され、終了する」これが一番の目標だと話された先生の言葉がとても印象的でした。

記念撮影の時、依頼した担当者が来ないトラブルがありましたが、何とか撮影を終了し早川幸紀副支部長のもとに懇親会が開かれ、田中延善副支部長の挨拶、ご出席最長老の飯田和質先生の乾杯で宴会がはじまりました。和気あいあいの会談さらに会員相互の親睦を深め、村北和広副支部長の挨拶で閉会となりました。

（本定　　晃：記）

埼玉支部

去る平成30年12月1日に第10回十全同窓会埼玉支部総会が川越駅近くの日本料理屋「さわや」で開催された。時期が悪く参加者は13名といつもよりも少なかったが、逆に濃密な議論と懇親がなされた点は好評であった。会計報告などの後に南青山アイクリニック・埼玉医科大学加藤直子客員准教授（平成2年卒業）から「最新の白内障手術と老眼治療」について、同期の埼玉医科大学総合医療センターブレストケア科矢形寛教授の軽妙な座長のもとで、多くの写真を用いて丁寧にご講演いただいた。最近の眼の治療の話題に関しては、皆我がことでもあり真剣で活発な質問が交わされた。

続いて本部から超多忙の中を快く駆けつけていただいた金沢大学副学長、医学系長・医学類長、腎臓内科科長の和田隆志教授（昭和63年卒業）から「医学部の現状と腎臓病診療update」と題してご講演を賜った。座長はサッカー部OBのよしみで埼玉医科大学総合医療センター呼吸器外科中山光男教授（昭和57年卒業）にお願いした。和田教授からは、まず金沢大学や附属病院の近況などご紹介をいただき、金沢駅に通ずるように日本で一番美しいという新しい大学病院の正面像などが強く印象に残った。続いて耳慣れぬキラルアミノ酸なる話題に関して最近のご研究の一端を素人にも分かりやすくご紹介していただいた。腸内細菌から放出されるアミノ酸で生体内の調節が行われているらしいという専門外ながら新鮮で興味深い話題に一同触れることができて大変啓発された。健康維持のため発酵食品やヨーグルトを摂取している会員にとっては科学的エビデンスとなる嬉しい内容であった。

今年異動され、講師もお願いした埼玉医科大学眼科加藤直子元准教授と今年新しく赴任された埼玉医科大学国際医療センター消化器外科平能康充准教授（平成10年卒業）には、ご紹介と花束贈呈を行った。集合記念写真を撮影した後、引き続いて懇親会が行われ、順番に近況などを紹介していただくなど、お酒と料理を食べながら時間いっぱい談笑に沸いた。その他の参加者は、宮前達也（昭和37年卒業）、山藤和夫（昭和51年卒業）、松成一朗（昭和62年卒業）、久慈一英（平成2年卒業）、北野善郎（平成元年卒業）、市川聡裕（平成5年卒業）、河野正志（平成6年卒業）、鈴木智成（平成6年卒業）である。以上、敬称略。

大きな出来事としては、当埼玉支部を実質的に立ち上げて発展してこられた瀬戸幹人前支部長（昭和56年卒業）が急な大病で昨年1月以来病床に伏されたことである。前副支部長としてお手伝いしていた久慈が支部長を急遽引き継ぐことになった。もとより非力ゆえ、十全同窓会諸氏の暖かいご支援とご指導を願望する。

（久慈　一英：記）

千葉支部

平成最後の十全同窓会千葉支部会総会が平成31年1月26日（土）に千葉市の懐石齋藤で開催されました。今回は、平成30年11月1日付で東邦大学医療センター佐倉病院乳腺外科の教授に就任された、榊原雅裕先生（平成6年卒業）の教授就任祝賀会を兼ねており、支部長の生水真紀夫先生（昭和56年卒業）をはじめ15名の先生方に参加いただきました。

千葉支部会は、会員の親睦を深めるため、毎年1月に総会兼新年会、夏に納涼会を開催しています。ところが昨年は納涼会が台風の影響で中止となってしまい、今回は1年ぶりの開催となりました。また、今回よりこれまで10年にわたり千葉支部会の幹事を務められた高橋敬一先生（昭和60年卒業）から石川博士（平成7年卒業）に幹事が引き継がれました。

支部長の千葉大学大学院医学研究院生殖医学講座主任教授の生水先生のご挨拶により開会しました。生水先生から千葉大学の改築事業がいよいよ大詰めとなり、新しい中央診療棟、研究棟の工事が順調に進んでいることが報告されました。続いて、長年千葉支部会の幹事を務められた高橋先生のご発声により乾杯が行われ、若いころ金沢の料亭で修業をされた大将の作る懐石料理に舌鼓を打ちながら、会員が親睦を深めました。

毎回恒例の参加者からのスピーチでは、50音順でのスピーチをお願いしたところ、能川浩二先生（昭和40年卒業）から、「今まで卒業年度順でいつも一番最初に話をするのが嫌になってきていたが、今回は50音順であり、新鮮だった」という、お褒めの言葉？をいただき、新米幹事としては、嬉しく思いました。また、会員のご子息が金沢大学医学部に入学したお話や、会員のご子息が別の会員の勤務されている大学病院で研修をされているお話など、金沢大学、あるいは十全同窓会ならではのスピーチが続き、千葉支部会のつながりの深さをあらためて認識させられました。

続いて、榊原先生の教授就任のお祝いとして、会長の生水先生から記念の花束と記念品の贈呈が行われた後、榊原先生からスピーチがありました。榊原先生は千葉大学第1外科に長くお勤めになられた後ご栄転されました。千葉大学第1外科には金沢大学出身者が大勢いらっしゃるとのことでした。

最後に新井公人先生（昭和55年卒業）から締めのご挨拶があり、盛会のうちに会が閉じられました。今年で平成も終わり、来年は東京オリンピックが開催されます。参加した会員の先生から、「年に2回支部会が開催されるのは千葉支部会だけではなかろうか」という、お話をいただきました。新しい年号になっても年に2回のペースでこの会を続けていけるよう、千葉県在住の若い先生方も気軽に参加していただければ幸いに思います。

生水支部会長から榊原先生への花束贈呈

出席者（敬称略、卒業年）：能川浩二（昭和40年卒業）、高柳正樹（昭和50年卒業）、新井公人（昭和55年卒業）、生水真紀夫（昭和56年卒業）、高橋敬一（昭和60年卒業）、寺田一志（昭和60年卒業）、菅谷芳樹（昭和63年卒業）、水野谷智（平成元年卒業）、田口達哉（平成4年卒業）、榊原雅裕（平成6年卒業）、諸岡智行（平成6年卒業）、石川博士（平成7年卒業）、橋本佐（平成12年卒業）、羽生裕二（平成20年卒業）、秋山文秀（平成23年卒業）

（石川　博士：記）

参加者の集合写真

三重支部

平成30年度十全同窓会三重支部会総会は、平成31年2月10日（日）に三重県津市の料亭「はま作」で行われました。本年度総会には8人の会員の先生方が出席しました。三重支部では、支部長原田資先生（昭和46年卒業）のもと、今回の総会も、和やかに進行していきました。今回は連休の日曜開催であったため多くの先生方がご用事のため欠席となりましたが、来年はご参加いただけることを願っています。（現在の三重支部の会員数は21名です。）

会計報告の後、近藤先生より、最近の臨床の話題をお聞かせいただき、また原田先生より、総会の話をしていただけました。その後、今年の金沢大学の医師国家試験の合格率や卒業後の進路のお話をうかがいました。現在の金沢大学の近況なども聞け、大変興味深かったです。その後は、いつものように、懇談会に移りました。懇談会では各先生方の趣味からお仕事のお話など多くのお話をうかがえてとても楽しく、勉強になりました。そして、懇談会も和やかな雰囲気のうちに終わり、閉会となりました。また、来年の同窓会も楽しみにしています。今回参加できなかった先生方も、ぜひ、ご出席をお待ちしています。

出席者（敬称略）
後列左から：春木祐司（平成17年卒業）、黒川義博（平成21年卒業）、近藤峰生（平成3年卒業）、大石晃嗣（昭和63年卒業）
前列左から：伊藤敏秋（昭和52年卒業）、祖父江直久（昭和51年卒業）、原田資（昭和46年卒業、支部長）、森一満（昭和51年卒業）

（黒川　義博：記）

沖縄県支部

平成30年度金沢大学医学部十全同窓会沖縄支部総会・懇親会は平成31年2月23日ダブルツリーbyヒルトン那覇首里城で開催されました。同門会会員数47名中20名の参加がありました。今年は本部からのゲストの招待はなかったのですが、沖縄県薬剤師会会長で昭和48年金沢大学薬学部を卒業した亀谷浩昌様をゲストとしてお招きしました。

まず初めに昭和57年卒業の私、知念弘が開会の挨拶を行いました。次に昭和60年卒業の浜端宏英先生が会計報告と当日参加できない先生方のコメントを紹介し、さらに先生の息子の瑛君が福井国体のライフル射撃で優勝したとの報告があり、全員拍手で祝いました。

懇親会では乾杯の音頭を昭和49年卒業の伊是名博之先生に執っていただき、歓談の時間となりました。その際昭和51年卒業の上里博光先生から日本酒の天狗舞の差し入れがありました。上里先生いつもありがとうございます。

お腹も落ち着いたころに沖縄県薬剤師会の亀谷浩昌様に沖縄県への薬学部の誘致の可能性につきお話をいただきました。いろいろハードルがあり、この先紆余曲折がありそうな印象を受けました。

引き続き、平成2年卒業の琉球大学医学部地域医療学准教授の奥村耕一郎先生に琉球大学の医学部内にある「おきなわクリニカルシミュレーションセンター」の紹介をしていただきました。非常に素晴らしい施設であるということばかりでなく、医学部生はもとより沖縄県全体のいろいろな施設や世代の方々が利用していることがわかり感銘を受けました。

その後記念撮影を行った後、参加している各々の先生方の自己紹介と近況報告を行ない、昭和47年卒業の知名保先生の前口上で四高寮歌、南下軍の歌を会員全員で合唱いたしました。

中締めの挨拶を平成3年卒業の沖縄協同病院副院長の横矢隆宏先生にお願いし、平成30年度の総会・懇親会を閉会といたしました。2次会も約10名の先生方にご参加いただき、遅くまで盛り上がった同窓会でした。

来年も同時期に同会を行う予定ですが、次回は本部からのゲストをお呼びする予定です。会員の皆さま、健康に留意していただいて来年も笑顔で再会いたしましょう。

今回の参加者は次の方々です。
写真前列左から大浦孝（昭和46年卒業）、喜屋武元（昭和46年卒業）、国吉勲（昭

和37年卒業）、知念弘（昭和57年卒業）、亀谷浩昌（昭和48年卒業）、安谷屋茂男（昭和46年卒業）、国吉光雄（昭和46年卒業）、2列目左より大城康彦（昭和48年卒業）、伊波久光（昭和53年卒業）、上里博光（昭和51年卒業）、安里公（昭和48年卒業）、伊是名博之（昭和49年卒業）、大城功也（昭和44年卒業）、大川哲平（平成18年卒業）、外間政利（昭和53年卒業）、3列目左から上原元（昭和50年卒業）、横矢隆宏（平成3年卒業）、浜端宏英（昭和60年卒業）、知名保（昭和47年卒業）、奥村耕一郎（平成2年卒業）、屋良朝雄（昭和55年卒業）、以上敬称略。

（知念　　弘：記）

ボストン支部

ボストンではこの冬、厳しいストームもなく比較的穏やかに過ごすことができています。昨年の秋にはメジャーリーグのボストン・レッドソックスがワールドシリーズを制し、さらに年が明けた1月にはアメフトのニューイングランド・ペイトリオッツが昨年の雪辱を果たしてスーパーボウルに勝利するという特別なシーズンとなっています。

さて、去る3月2日にクーリッジコーナーにありますベトナム料理店「Pho Lemongrass」にて金沢大学同窓会ボストン支部会を開催しました。支部会長のハーバード大学眼科教授広瀬竜夫先生をはじめ、岩田恭宜先生（ブリガム・アンド・ウィメンズ病院）、Haruka Badger先生（ブリガム・アンド・ウィメンズ病院）、中河秀俊先生（ダナ・ファーバー癌研究所）、井川寛章先生（ジョスリン糖尿病センター）、原島愛先生（ジョスリン糖尿病センター）が参加され、寺本了太（ブリガム・アンド・ウィメンズ病院）が幹事を務めました。ベトナム料理やタイ料理などを美味しくいただきながら、お互いの近況や今後の展望について和やかに語らいました。

今回はBadger先生（旧姓馬渕晴佳先生）を新たに会にお迎えし、ボストンで臨床医としてご活躍されているお話を伺うことができました。先生は金沢大学を卒業後、子育ての合間を縫ってアメリカ医師資格を取得され、現在ではハーバード大学の教育病院であるブリガム・アンド・ウィメンズ病院でPrimary care physicianとしてご勤務されています。

また、3月末で帰国されます岩田先生を送別し、ボストンでの充実した研究生活やボストンにすっかり馴染んでいらっしゃるお子さんのお話などを楽しく聞かせていただきました。会員はそれぞれ仕事の背景も異なりますが、異国の地で同窓生と語り合う喜びを分かち合い、明日からの糧とすることができました。

（寺本　了太：記）

関西支部

3月31日（日）に2019年度の関西支部総会が京都支部主催で、桜が咲き始めた円山公園にある長楽館で開催されました。2019年度としては１日早いのですが、円山公園の満開の桜を見ていただきたいと企画しました。しかし今年は寒さが長引き予想が外れ、主催者全員気をもんでいましたが何とか咲いてくれてほっとしました。

大阪支部からは4名、奈良支部からは５名、滋賀支部からは2名、兵庫支部からは１名、主催の京都支部から13名の出席がありました。京都駅からのタクシー待ちが長蛇の列で、市内も観光客がいっぱいで渋滞、開会が30分遅れの12時からになりました。

講演は昨年の大阪支部主催の近畿支部総会に本部から来られた副学長（病院改革担当）兼病院長の蒲田敏文先生をお招きして、「金沢大学附属病院の現況について」お話していただきました。蒲田先生の「きれいな病院で」、「職員が安心して気持ちよく仕事でき」、「それによって患者さんも安心して受診してもらえる」ように、との理念に基づき運営しておられる様子をうれしく聴かせていただきました。昨年京都に講演に来られた金沢大学の医学部の複数の先生から「蒲田先生が院長になられてから病院の仕事がしやすくなり、病院が活性化していることを聞いていたので、蒲田先生のお話をお聞きし納得しました。

次に私がお願いして、蒲田先生が昨年NHKの『ためしてガッテン』に出演され膵がんの早期診断の難しさを述べられたことに関してお話しいただきました。「ためしてガッテン」の内容は、「尾道の開業医が皆さん超音波診断装置を持っていて、早期の膵がん患者がいっぱい見つかり、視聴者の皆さんは医師にもっと超音波を撮ってもらうように頼みましょう、開業医はもっと超音波検査をしてください」といった内容でした。この放送内容は間違いで、蒲田先生によると、「開業医が超音波で膵管の幅とのう胞の有無を確かめて異常があれば尾道の膵がんの専門医に紹介し、内視鏡で膵管に管を挿入して採取した膵液で膵がん細胞の有無を検査しているので、早期に膵がんがみつかっている」とのことでした。腹部超音波検査は開業医が以前からやっていることで、それでもなかなか早期がんが発見できなくて困っているのが現状です。尾道の功績は、単に開業医の超音波によるスクリーニングだけではなくて、特殊な検査法を用いた専門医と、検査の苦痛に耐えた患者さんの功績だったのです。目からうろこでした。

懇親会は昭和34年卒業の奈良支部長の西尾功先生の乾杯の音頭で始まり、各支部長の近況報告をしていただき3時ちょうどに会を閉じ、あとは円山公園の桜見物を三々五々していただきました。

追記：従来、近畿支部として報告されてきましたが、三重支部は愛知支部と連携しておられるようなので、今回から、各支部長先生の了承が得られましたので、関西支部報告とさせていただきました。（和歌山支部のみ、まだ結成されていません）

（八田　一郎：記）

十全昔話

乾杯の発声で外科の久留 勝教授からお叱りを受けたこと

山口　成良
（昭和27年卒業）

私は昭和27年（1952年）3月、当時の金沢医科大学を卒業しましたが、卒業式のあと恩師の教授職の方々をお招きして、当時の学生食堂の2階で謝恩のパーティーを開催しました。

当時、私はクラスの総代をしていましたので、パーティーの始めに司会かたがた謝恩の言葉を述べたあと、「乾杯の音頭を取りたいと思います」と述べたところ、すかさずそこに列席しておられた外科の久留勝教授から「山口君、乾杯の発声は、その場に出席しておられる年長の方がされるものだ」とたしなめられました。その時の場面を70年近くたった今でも、ありありと覚えています。

その後、色々のパーティーで司会者から乾杯の発声をあらかじめ頼まれた時には、その場の年長者に依頼するように返事しておりました。

しかし、時代が変わって、最近では公式でないパーティーでは敢えて若くて威勢の良い方に乾杯の音頭をお願いしている会もみかけますので、一概に年長者にお願いするということも言えないかと思います。

（後日談）私が大学を卒業してから数年して、出張留学として、ロサンゼルスのUCLAの脳研究所にいた時のことであります。金沢大学から大阪大学に転任されておられた久留教授が、アメリカの学会での帰途、UCLAに寄られました。長い旅のお疲れか、憔悴しておられるように拝見いたしました。私を見かけられて、「山口君は、ここにいるのか」と声をかけられ、同席しておられた大阪大学からの留学生に対して、「しっかり研究するんだよ」とわざわざ餞別まで出されて励ましておられたその優しい心遣いに感銘を受けました。

時の流れとよもやま話

市川　博和
（昭和42年卒業）

昭和44年のハワイ、Queen's Medical Centerの夜の救急室での出来事です。ぐったりした3、4歳の子どもが救急車で搬入されてきました。ここまでは特に普段の急患と変わりないのですが、診察台に乗せて診察のため服を脱がせてびっくり、体中が青あざ赤あざだらけです。息はしているようですが、無表情に泣きもせずぐったりしています。「これは…！」奇妙な全身打撲としか思えませんでした。付き添っている男は「俺は知らない」と言い、私が「貴方はこの子の父親ですか」と問うと、男は「そうだが…」と。「貴方の子どもは殴られたような傷があるのだがどうしたのだ」と聞くと、男はおどおどして黙ってしまいました。とにかく子どもの生体反応を調べ、治療にとりかかりました。そこへ同僚のアメリカ人医師がやってきて、“Oh,battered baby! Again!”（乱打された幼児だ、またか！）と言うなり男に向かって「おまえはいったいどういうことだ、いい加減にしないか！」と詰め寄っています。私が唖然としていると「ドクター市川、最近これがホノルルでも多くて全く困ったものだよ。信じられない、一体どうなっているのかね」と。当時の日本では我が子をここまで痛めつける親をまだ見たことがなく、さっぱり理解できませんでした。とにかく救命治療だと、チャートを記入しながら看護師に点滴、レントゲン、血

十全昔話

液検査、入院準備などをオーダーしていると、拳銃を手に構えたポリスが救急室へ入って来ました。側にいた父親らしき男に拳銃を向け、「手を挙げろ！うつぶせになれ！」と言い、手早く身体検査をし凶器の有無を確かめ、男を廊下の椅子に連れ出し事情聴取を開始しました。その子の目を背けたくなるような無惨な姿は、医師としても恐ろしく、やりきれなく、当時のアメリカ社会の一角を覗いてしまった思いでした。

私は大学卒業後に立川の米空軍基地でのインターンを終えてから、昭和47年までの3年間ホノルルの病院で外科医として臨床現場で働いていました。救急当番は輪番制のチームで、病院では日本人の私以外に台湾人、シンガポール人、日系アメリカ人、イタリア系、中国系、アフリカ系、インド系などさまざまな顔の医師や看護師達と仕事をしていました。多国籍チームも、医療という仕事がなければただの異人種の集まりですが、星条旗の下ではそういう印象が全くないのがアメリカの社会でした。今思えば当時のアメリカは医療も日常も日本の2、30年先を走っていた感じです。日本では野菜は八百屋、魚は魚屋という時代でしたから、アメリカの何でも揃うスーパーマーケットは眩しかった一方、物を買えば必ず消費税を払わされるのが驚きでした。品物は豊富で、すでに使い捨ての生活でした。女性の社会進出も進んでいました。医療に関しても、当時日本で垂涎の的であったアメリカの医学書の内容をそのまま実践できました。昼夜英語で診療し、記録し、オーダーし、頭はフル回転、仕事はとても忙しく、疲労困憊だったのも懐かしく思います。当時はまだ若く、3年間は本当に新しい発見、驚き、感激ばかりでした。

ところが日本に戻って20年程経ったころ、日本にはないと思っていた「児童虐待」が報道され始めました。アメリカに追いつけ追い越せと進んできた日本は、繁栄と一緒に影の部分も追いついてしまったようです。

ハワイから帰国後は、京都大学で仕事をした後故郷の高知に帰って診療所を開きました。ホノルルでの生活はとても良い経験でしたが、食に関しては和食党の自分には辛かったです。ここで山海の幸に恵まれた高知の食に関わる方言を2、3ご紹介しようと思います。

高知県は東西に広く、東部と西部では方言が大分異なります。私の出身地、東の言葉は他地域の方にはフランス語みたいに鼻にかかって聞こえるでしょう。ある日、東部に位置する高知空港内の土佐料理店で食事中に、一緒にいた家内が「‘かいさま寿司’があると書いちゅうね」と言うので「カイサマ？どんな魚やったかなぁ」と考えていると「太刀魚の身を表に、背を内側に乗せちゅうお寿司よ。かいさまは逆さまの土佐弁で、着物も裏表反対に着るとそう言うよ」と。そういえばと、少年の頃おいしく食べたかいさま寿司を思い出しました。また別の日、自宅で食事中に子供が「お父さん、お魚をたつくって！」と言うので何のことかと思ったら、近所でお世話になっていた年配の方から教わった魚をほぐすの意の土佐弁でした。田作りが語源のようです。土佐弁も時代と共に変化し、有名な坂本龍馬の「日本の夜明けぜよ！」の「ぜよ」も今ではあまり使われなくなってきたようです。診療所で働いてくれていた県西部の宿毛（すくも）市出身の看護師さんから教わった方言で「いっちきち、もんちきち、にいち、やいち、くうち、とこばれ（行ってきて、帰ってきて、煮て、焼いて、食べて、寝よの意）」というのがあります。同じ高知でも全く分かりませんでしたが、なんとなくリズミカルな生活の躍動感がありませんか？

日本の中にもまだ知らないこと、忘れていることが沢山ありそうです。

謝 恩 会

平成31年3月22日、金沢ニューグランドホテルにて平成30年度金沢大学医学類卒業生より、お世話になった先生方に対する謝恩会が開催されました。卒業生105名、先生方27名の132名の方々にご参加いただきました。ご臨席いただいた先生方に深く感謝申し上げます。

1年前に謝恩会実行委員長に任命されたときは、右も左もわからず不安な気持ちで一杯でしたが、金沢ニューグランドホテルの方々、昨年度の実行委員長の小谷将太先生、今年度謝恩会委員の14名の皆さま方など多くの方々のおかげをもちまして、何とか当日を迎えることができました。この場をお借りしまして、改めて厚くお礼申し上げます。ありがとうございました。

宴会のはじめは卒業生を代表して、学年代表の西川和希さんに挨拶をいただきました。お世話になった先生方への感謝の気持ちを述べた後、6年間の学生生活を振り返りながら、今後は医師として医学の発展のために日々努力し、成長し続けることを宣誓されました。卒業生一同、今後の医師としての覚悟と姿勢を今一度考える時となりました。

引き続いて、開会のご挨拶を医学類長の和田隆志先生より、乾杯のご挨拶を医薬保健学域長の中村裕之先生よりいただきました。和田先生からは、金沢大学を卒業したことに誇りを持ち、探究心を忘れずに前進し続けていくようにと激励のお言葉をいただきました。中村先生からは、困難に直面したときには気兼ねなく、母校である金沢大学を頼ってくださいと心強いお言葉をいただきました。

歓談の後、小市さん、中澤さん、南部さん、西澤さんにより、ピアノ、アルトサックス、チェロ、フルートそれぞれの持ち味を生かした素晴らしい演奏を披露してもらいました。1曲目の「カントリーロード」では自然と手拍子が沸き起こり、2曲目、3曲目の「おくりびと」、「春よ来い」では会場全体が華やかな雰囲気に包まれました。

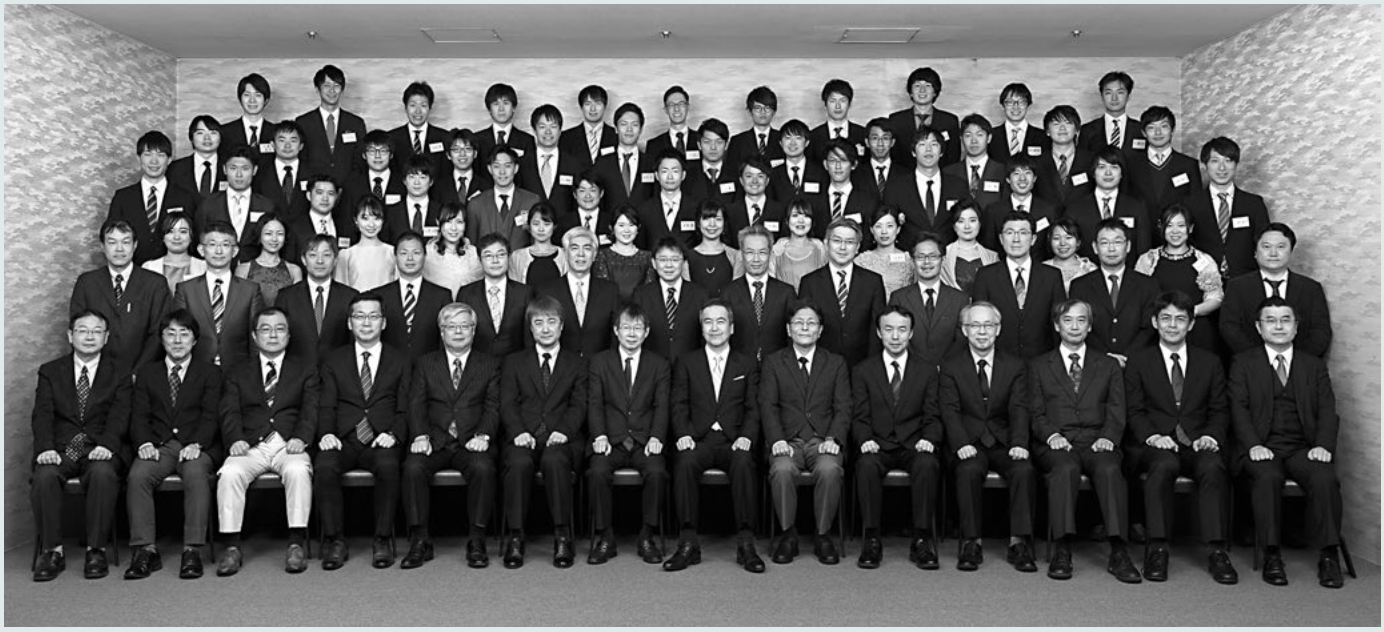
また、ビンゴ大会も開催されました。歯科口腔外科の川尻先生からの贈呈品を含む数々の景品を前に、“リーチ”、“ビンゴ”の掛け声や笑い声が響いていました。一等の景品が最後まで残る奇跡的な展開に、会場は最後まで熱気に満ち溢れていました。

会場は盛況のうちに閉幕のときを迎え、閉会のご挨拶を金沢大学附属病院長の蒲田敏文先生よりいただきました。天才にならなくてもいいから普通の医師になるようにとのメッセージを卒業生にくださいました。また、今後の金沢大学附属病院の展望をお話しされ、ぜひ金沢大学に戻ってきてくださいと温かいお言葉でご挨拶を締めくくられました。

私たちはそれぞれこの4月から医師として働き始め、自分が長年思い描いてきたものに一歩ずつ近づき始めることになります。新しい環境でわからないことも多く日々の業務をこなすのに精一杯になってしまうこともあるかもしれませんが、どのような環境でも、金沢大学で学んだことの誇りと初心を忘れず、医療に貢献してまいりたいと思います。

最後に、本謝恩会開催に際し、医王保護者の会、十全同窓会の皆さまにご支援賜りましたこと、深く感謝いたします。ありがとうございました。

（平成30年度謝恩会実行委員長
和田　侑也：記）



平成31年3月卒業者進路

浅野　智紀　大手前病院
足利　恵瑠　秋田赤十字病院
安達永里子　金沢医療センター
石川　駿之　武蔵野赤十字病院
石川真悠子　岡山大学病院
石田　　静　金沢医療センター
石林　健一　石川県立中央病院
石原　拓也　JCHO東京新宿メディカルセンター
伊勢　孔祐　金沢大学附属病院
岩科　　慧　東京医科大学八王子医療センター
岩田　茉祐　富山県立中央病院
上野　雄平　金沢大学附属病院
魚谷雄太郎　金沢大学附属病院
江上　幸憲　石川県立中央病院
大澤　真治　東京北医療センター
大脇　聖楽　名古屋医療センター
小川　隼一　金沢大学附属病院
奥村　　英　富山赤十字病院
折本　竜太　東京女子医科大学八千代医療センター
鍛治　　稔　金沢大学附属病院
加戸　太陸　金沢大学附属病院
加藤　雅晃　京都桂病院
鹿野　真代　倉敷中央病院
上谷　祐介　石川県立中央病院
河井　陽昭　高槻病院
河合　　慈　金沢大学附属病院
川口　健太　小牧市民病院
菊井　　創　名古屋医療センター
岸田　晟利　金沢大学附属病院
北市　高之　金沢大学附属病院
北山　祥平　厚生連糸魚川総合病院
木村　　想　厚生連高岡病院
小市　真琴　石川県立中央病院
古寺　理紗　恵寿総合病院
小松　直人　沖縄県立南部医療センター・こども医療センター
坂田　正梧　佐久総合病院
酒徳　直明　金沢大学附属病院
左郷　美森　新久喜総合病院
篠崎　哲学　坂総合病院
島野　　隼　石川県立中央病院
下　優太郎　金沢大学附属病院
白川　　巧　厚生連高岡病院
杉森　文香
鈴木　建翔　金沢医療センター
須田　一平
清家　悠樹　黒部市民病院
関口　小雪　東葛病院
曽根　　渉　富山県立中央病院
高山　秀雄　金沢大学附属病院
竹内　一博　市立砺波総合病院
武田　栞幸　総合病院　聖隷浜松病院
竹村　直起　金沢大学附属病院
田中　大貴　富山県立中央病院
谷村　　純　相澤病院
田端　勇作　鈴鹿中央総合病院
田村　　啓　千葉医療センター
築田　紗矢　金沢大学附属病院
辻本　有瑳　公立能登総合病院
土田　航祐　市立砺波総合病院
筒井昌太郎
寺澤あかね　済生会京都府病院
寺田理沙子　静岡市立静岡病院
永井　幸輔　黒部市民病院
中澤　祐介　金沢大学附属病院
中社　泰雅　金沢大学附属病院
中西　　洋　名古屋第二赤十字病院
中村　悠理　西淀病院
南部　鴻介　金沢大学附属病院
西尾　次郎　一宮西病院
西川　和希　淀川キリスト教病院
西澤会美奈　東京医科歯科大学医学部附属病院
西村　香穂　富山県立中央病院
西村　愛世　金沢大学附属病院
西本　麻衣　福井県立病院
沼田　紗弥　厚生連高岡病院
野田　佑真　横浜市立みなと赤十字病院
東　　大貴　伊勢赤十字病院
平島理紗子　金沢医療センター
廣井　　翼　日本赤十字社和歌山医療センター
福本　七彩　名古屋第二赤十字病院
藤澤　桃子　富山県立中央病院
藤田　聡子　JCHO金沢病院
藤村　陸志　石川県立中央病院
本江　真人　黒部市民病院
本田　俊哉　セコメディック病院
前田　　麟　厚生連高岡病院
増田　佳純　愛仁会　明石医療センター
水谷　雅哉　済生会習志野病院
南川　貴大　福井県済生会病院
三又　理紗　公立昭和病院
宮　　一紀　東京大学医学部附属病院
村井　佑至　富山赤十字病院
村瀬　裕哉　金沢大学附属病院
百木　菜摘　湘南藤沢徳洲会病院
森田　幸輝　富山県立中央病院
守屋美知瑠　武蔵野赤十字病院
安井　友紀　日本生命病院
山本　和幸　京都民医連中央病院
山本　　悟　大阪市立大学医学部附属病院
山本　泰資
山本　祥博　金沢大学附属病院
吉川　燿士　金沢大学附属病院
吉田宏太朗　千葉西総合病院
吉田　　司　富山県立中央病院
和田　崇宏　金沢大学附属病院
和田　侑也　金沢大学附属病院

（五十音順）

Student Doctor認定証授与式

平成31年4月8日、系統試験や共用試験を乗り越えて5年生に進級した私たちは、Student Doctor認定証授与式を迎えました。和田医学類長からStudent Doctor認定証を受け取るに伴い、これまでの講義室で学ぶ医学とは異なり、これから実際の臨床現場に身を置く実感や緊張を身に染みて感じました。和田医学類長、蒲田病院長からお言葉を賜り、Student Doctorとして責任を持って行動しなければならないと改めて自覚し、身が引き締まりました。

入学して以来4年間、私たちは講義室において同級生たちとともに基礎知識を身に付けることを目標に学習してまいりました。しかしこれからは実際の臨床現場に立ち、さまざまな疑問を抱きそれに対する解決を自分たちで模索する能動的な姿勢が求められます。日々の実習の中で生じる疑問は、教科書通りではないことがあるかもしれませんが、そうした問題にも思考力や推測力を培うことで解決に導くことができるようになりたいと思います。さらには仲間と問題を共有し、協力できるようなチームワークも身に付けられるようになりたいです。そしてこの2年間の実習を通して、理想とする医師像に近づくためにはどうすれば良いのか、自分に足りていないことは何かをしっかりと把握し、今後の自分の医師としての道について改めて考えていきたいと思います。

また、ご指導くださる医師、コメディカルの方々はもちろんのこと、患者さんから医学を学ばせていただく立場であるので、常に患者さんに対する感謝と敬意を持ち続けるということも忘れてはなりません。まだまだ経験や知識が乏しく未熟な私たちStudent Doctorにご理解、ご協力くださる患者さんに対し、少しでも安らぎや幸せなどの利益を与えられるようにこの2年間を過ごしていきたいと思います。目標である医師に一歩ずつ近づいていく過程で、今までお世話になり続けた両親や祖父母、友人や先生方、私の周りの皆さまへの感謝の気持ちが一層深まってきました。今の自分の環境を築いてくださったすべての方々に、将来立派な姿を見せることが恩返しになると思うので、この2年間を充実したものにして自分を成長させていきたいと思います。

最後に、Student Doctor 認定証授与式を催してくださった先生方や学務の方々、関係者の皆さまに5年生を代表してお礼を申し上げます。本当にありがとうございました。

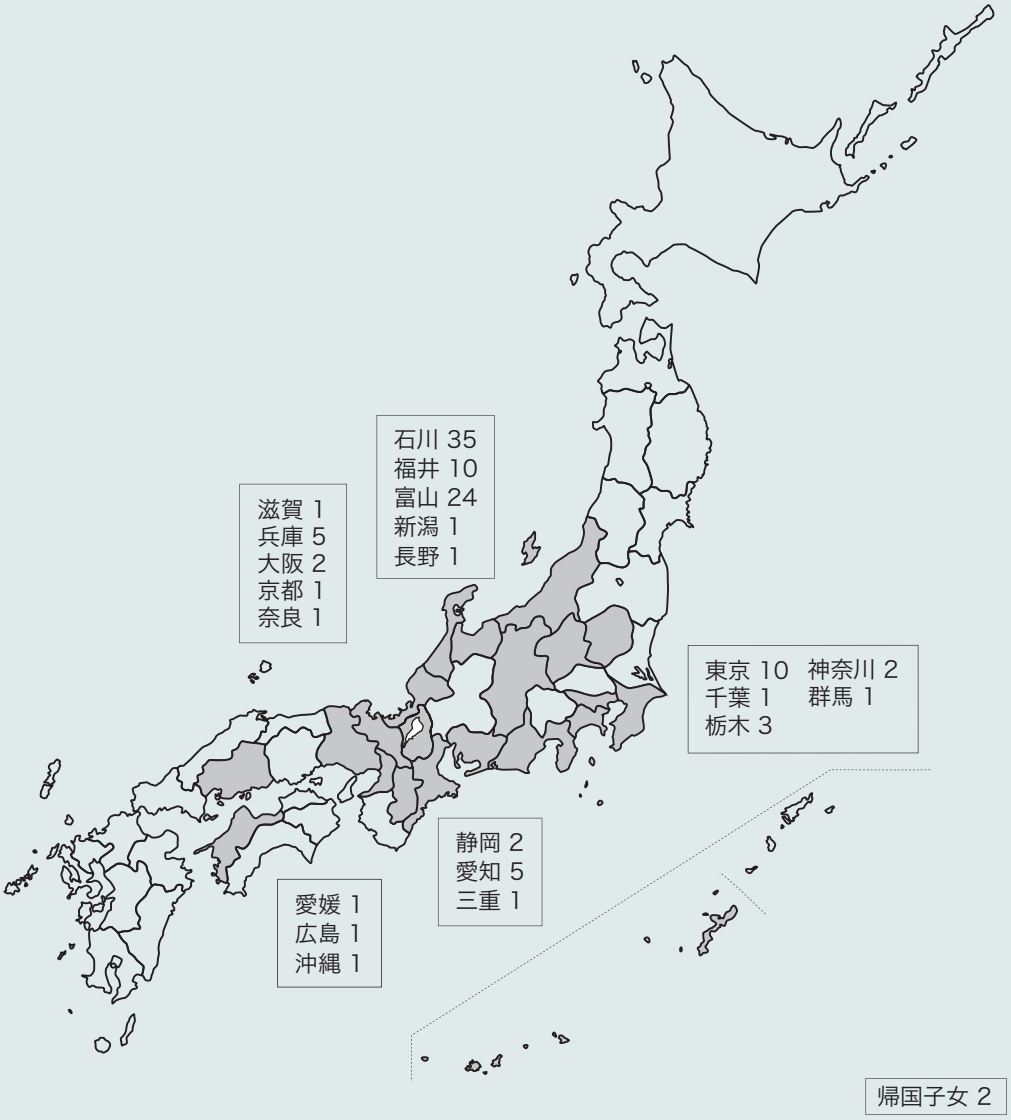
（医学類5年　山﨑　智史：記）

会費納入のお願い

同窓会事業は皆さまからの会費により支えられています。

同封の振込用紙をご利用の上、
お納めくださいますようお願い申し上げます。

平成31年度 医薬保健学域医学類入学者 出身都道府県調



2019年度「金沢大学ステークホルダー協議会in大阪」および「合同懇親会」のご案内

学長から、本学の教育・研究・運営等の近況をご報告させていただき、皆さまからの忌憚のないご意見・ご要望を頂戴する場と考えております。

出席希望の方は、2019年9月13日（金）までに5．連絡先へE-MAILないしFAXでお願いいたします。

1．日　時：2019年10月19日（土）　17:00~20:00（受付16:30より）
2．会　場：大阪新阪急ホテル2階（〒530-8310　大阪府大阪市北区芝田1-1-35　TEL 06-6372-5101）
3．次　第：【金沢大学ステークホルダー協議会in大阪】 17:00～18:20　2階『花の間』【参加無料】
　　【合同懇親会】　18:30～20:00　2階『紫の間①②③』
4．合同懇親会費:10,000円（予定:当日、受付にて現金でお支払い願います。）
5．連絡先:金沢大学学友支援室　E-Mail：gakuyu@adm.kanazawa-u.ac.jp　FAX：076-234-4033
6．お申込みの際：氏名・卒業学部・卒業年・住所及び
　　A：ステークホルダーin大阪のみの参加、B：合同懇親会のみの参加、C：両方参加をお知らせ願います。

放射性医薬品・抗悪性腫瘍剤

@ゾーフィゴ®静注

放射性医薬品基準 塩化ラジウム（^{223}Ra）注射液　薬価基準収載

劇薬，処方箋医薬品*（＊注意－医師等の処方箋により使用すること）

※効能・効果，用法・用量，警告を含む使用上の注意につきましては製品添付文書をご参照ください．

Bayer

資料請求先
バイエル薬品株式会社
大阪市北区梅田2-4-9 〒530-0001
http://byl.bayer.co.jp/

L.JP.MKT.OH.01.2018.2825

2018年1月作成

Creating for Tomorrow

昨日まで世界になかったものを。

私たち旭化成グループの使命。
それは、いつの時代でも世界の人びとが“いのち”を育み、
より豊かな“くらし”を実現できるよう、最善を尽くすこと。
創業以来変わらぬ人類貢献への想いを胸に、次の時代へ大胆に応えていくために—。
私たちは、“昨日まで世界になかったものを”創造し続けます。

AsahiKASEI

旭化成ファーマ株式会社
URL:http://www.asahikasei-pharma.co.jp

GE Healthcare

Partners for Better Health

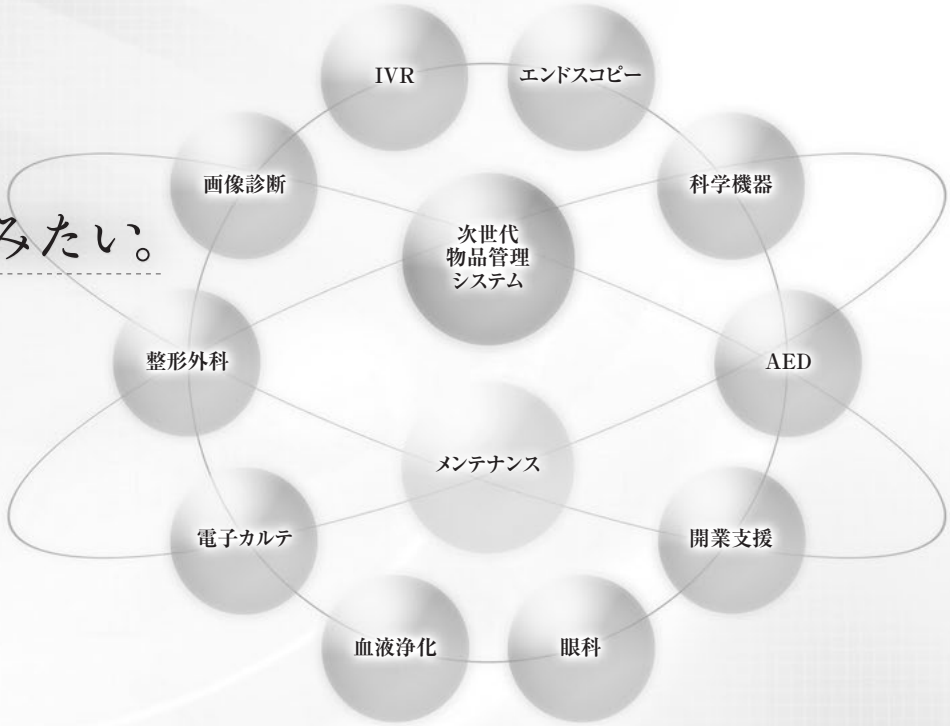
Helping You Achieve Desired Outcomes

先生方が求めるアウトカム（結果）を達成するための
パートナーとなるべく 全力を尽くします

GEヘルスケア で検索

JB37591JA

医療とともに
大きな夢を育みたい。



冨木医療器株式会社
http://www.tomiki.co.jp

本社 〒920-8539 金沢市問屋町2-46 TEL（076）237-5555（代） FAX（076）237-6584
支店 金沢・富山・福井 営業所 七尾・高岡・敦賀

科学するヤクルト

ヤクルト中央研究所
（東京都国立市）

ヤクルトには「科学するひと」がいます。多くの研究者が、日夜、世界の人々の健康を願い、研究開発に力を注いでいます。
乳酸菌にできることはもっともっとあるはず。私たちはそう信じて、今日もここヤクルト中央研究所で、
すこやかな未来のために一人ひとりがミクロの世界を科学し続けています。

人も地球も健康に
Yakult

株式会社ヤクルト本社 https://www.yakult.co.jp

まごころで健康を
ALP アルプ
Academic
Laboratory
Pharmacy

調剤薬局 アルプ薬局／臨床検査／食品･環境衛生検査／コンサルタント業務

mundipharma

がんに負けない
希望をつくれ。

人がしないことに、挑戦する製薬会社。 ムンディファーマ

nihon medi+physics

明日の幸せを願い、
「診る」そして「治す」核医学。

私たちは、がんや心臓病、脳血管疾患および認知症などの
早期発見に役立つSPECT・PET検査用放射性医薬品や、
がん治療用の医療機器、疼痛緩和に有効な治療薬などの
創出を通じ、これからも皆様の健康に貢献します。

for the happiness

〒136-0075 東京都江東区新砂3丁目4番10号 TEL (03) 5634-7006 (代)
http://www.nmp.co.jp/
日本メジフィジックス株式会社
2018年8月作成

ホテル日航金沢

城下町・金沢を彩る"舞台"という発想のホテルです。

地上30階、高さ130mは北陸髄一のスケールを誇り、多彩で充実した施設と
きめ細やかなおもてなしで皆様をお迎えいたします。

〒920-0853 石川県金沢市本町2-15-1（JR金沢駅兼六園口前）
Tel:076-234-1111 Fax:076-234-8802

ホテル日航金沢 検索 www.hnkanazawa.jp

会報編集委員の紹介

学内編集委員（14名）

太田　哲生
蒲田　敏文
中村　裕之
横山　　茂（副編集委員長）
絹谷　清剛（編集委員長）
篁　　俊成
和田　隆志
佐々木素子
谷口　　巧
山本　靖彦
中田　光俊
倉知　　慎
毎田　佳子
濱口　儒人

学外編集委員（20名）

山口　成良
津川　龍三
赤祖父一知
佐藤　　保
三輪　晃一
橋本　琢磨
中村　信一
勝田　省吾
山本　　健
山本　　博
山岸　正和
大村　健二
横山　　仁
大島　　徹
横山　　修
中本　安成
常山　幸一
古川　健治
若山　友彦
中西　清香

以上34名で構成されています。
土屋弘行十全同窓会理事長には、
編集委員会にご参加いただいております。

表紙の写真

医の源流　未来への継承

オランダ人教師スロイスとホルトルマンに学び、金沢大学医学部同窓の先達となった金沢医学館第一期生9名の像「医の源流　未来への継承」。創立150周年を記念し平成24年7月に建立されました。

題字：中村　信一（十全同窓会会長）

発行：**金沢大学医学部十全同窓会**
会報編集委員会
〒920-8640　金沢市宝町13-1
http://juzen-ob.w3.kanazawa-u.ac.jp

発行日：令和元年5月20日

印　刷：能登印刷株式会社

会費納入のお願い

今年度より同窓会会費を1月号に併せて徴収させていただくこととなりました。
十全医学会とは別組織であることをご理解ください。
名簿改訂は5年毎に変更となりました。次回改訂版（2020年）は、従来と同様に会費納入者へお届けいたします。

編集後記

今年の冬は昨年の豪雪から一転して暖冬であり、暖かく陽気に包まれた冬でした。昨年は豪雪のため、国道をはじめとする交通網が遮断され、日用品の供給にも支障が生じたりしたことを忘れるかのような冬であり、新しい時代を先取りした天候でありました。4月30日に「平成」の時代が終わり、5月1日から新しい元号「令和」が始まり、いよいよ新しい時代の幕開けです。新元号は万葉集から出典され、人々が美しく心を寄せ合う中で文化が生まれ育つ。梅の花のように、日本人が明日への希望を咲かせる国でありますようにと願いつつ決められたそうです。来年には東京オリンピックが開催予定であり、新しい時代が平和に満ち、希望を咲かせていけることを願うばかりです。

金沢大学附属病院も、内科の再編成が行われ、臓器別（消化器、循環器、内分泌代謝、腎臓、リウマチ膠原病、血液、呼吸器）に分かれ、新しい体制のもと診療を開始しております。連携しやすく、垣根のない内科が始まり、益々発展していくものと思われます。また、その他の部署の再編成も考えられております。同窓会会員の中には戸惑う先生方も、また母体となられる組織がどうなるかとの疑念を抱かれる方もあるかと思いますが、新しい時代の幕開けです。期待しながら見守っていただければ幸いです。

今回の会報も内容は盛り沢山です。日頃の忙しいお仕事の合間に気軽に見ていただければと思います。

（谷口　　巧：記）